

第4節 光構内(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査



写真 106 A～D調査区調査前全景（北西から）



写真 107 E～G調査区調査前全景（北東から）



写真 108 H調査区調査前全景（北東から）

1. 教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う本発掘調査・立会調査

調査地区 光構内

調査面積 約1014.4m²(本発掘調査:A～C調査

区約45m²、D調査区約16.1m²、E～G

調査区約51.2m²、II調査区約13.1m²、

立会調査約889m²)

調査期間 本発掘調査 平成24年5月21日～

8月16日

立会調査 平成21年8月7日～11月

20日・12月7日

調査担当 田畠直彦・松浦鶴呂

調査結果

(1) 調査の経緯(図76、写真106～108)

平成24年度に教育学部附属光学校下水道接続工事が決定したこと併び、附属小学校・中学校校舎から、正門北西側に位置する本管に至る排水管の新設工事が行われることになった。

当館では、平成23年度に上記計画に併び、予備発掘調査を実施した。平成23年度第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(10月11日開催)でその結果を審議した結果、予備発掘調査区周辺については頗著な遺構等が確認されなかったことから、立会調査を行うことになった。また、本発掘調査区については、詳細な工事計画が決定次第、地点を検討して実施することになった。

今回の工事決定を受け、本発掘調査では、附属中学校北西側にA～D調査区、附属小学校北西側にE～G調査区、附属中学校体育館南東側にII調査区を設定した。

また、立会調査では污水橋設置箇所を工事施工時の名称に準じてNo.0～16とし、その他報告箇所を1～49地点とした。

以下、本発掘調査・立会調査の順で報告する。

【1】

- 1) 田畠直彦(2013)「第5節1 教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う本発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報 平成23年度』山口大

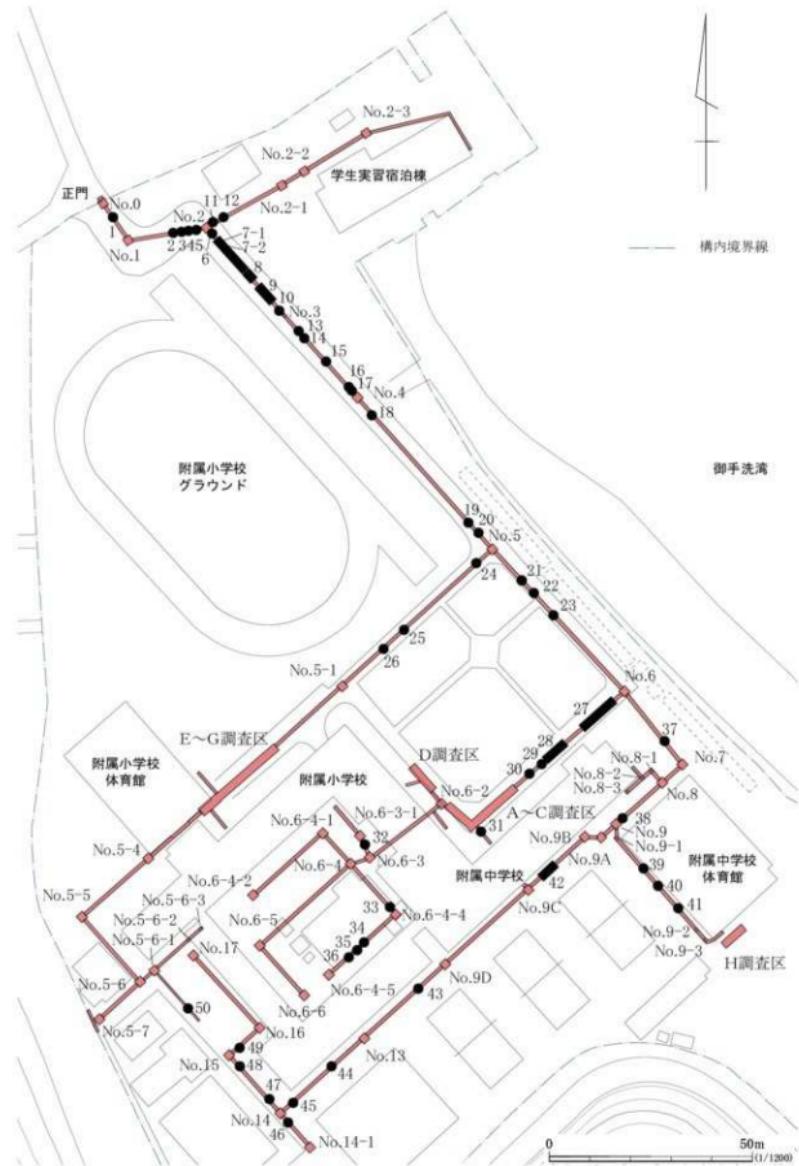


図 76 調査区位置図

(2) A～C調査区

a. 基本層序(図77・写真109～111)

A～C調査区は、附属中学校校舎北西側に位置する。基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(アスファルト 層厚約4～9cm)
- 第2層 造成土(層厚16～30cm)
- 第3層 第1造構面形成層(層厚11～46cm)
- 第4層 第2造構面形成層(層厚6～24cm)
- 第5層 第3造構面形成層(層厚7～25cm)
- 第6～21層 第3造構面形成以前の堆積層(層厚78cm以上)

第3層は第3～1～9層に細分される。第3～1～5層は第1～1造構面形成層、第3～6～9層は第1～2造構面形成層である。第4層は第4～1～4層に細分される。ほぼ水平に堆積しており、第4～1～3層は南西端を除くA調査区に分布し、第4～4層はA調査区南西端からB・C調査区に分布する。第5層は第5～1～3層に細分される。B調査区北東部より南西側には第5～3層が堆積する。また、B調査区北東部では第5～3層が北東部へ傾斜しており、その上に第5～2層が堆積する。

第9層以下は部分的な掘削にとどまったため、詳細は不明であるが、第9～19層は、南西から北東方向に傾斜して堆積している。

b. 造構(図77～81・写真112～128)

第1造構面は近世～近代の造構面と考えられる。造成土直下で検出された第1～1造構面は検出造構からガラス・瓦・コンクリート片等が出土することから、現在の校舎以前に存在した木造校舎に伴う造構と考えられる。このため、第1～1層は機械掘削時に撤去し、第1～2造構面で造構検出を行った。第1～2造構面は、平成15年度実施の小学校エレベーター昇降路等新設に伴う試掘調査・立会調査区(以下平成15年度調査区)の第1造構面に対応すると考えられる。第1～1造構面の造構のうち、1～1-SK-1～5はゴミ捨て穴と考えられる。第1～2造構面では、拳大の石が敷き詰められた1-2-SD1を検出した。また、ピットを17基検出した。ピットは径20～30cmのものが主体で、深さはほとんどが20cm以内であり、その機能は不明である。1-2-SD1・ピットからは造構の時期を示す遺物がほとんど出土しなかった。縄文土器、土師器、須恵器片が出土したが、下部造構面及び造構を破壊したことにより混入したのであろう。なお、以下で報告する土師器片については、極小の破片もあるため、弥生土器との区別が困難なものも含まれる。

第2造構面は平成15年度調査区の第2造構面に対応し、古墳時代と考えられる。ピット18基、土壙5基を検出した。このうち、SK1・2は埋土が第3層と近似していること、SK2から磁器、土師質土器片が出土したことから、第1造構面の造構であった可能性が高い。SK3～5は部分的な検出にとどまつたため全体の形状は不明で、断面形状は浅い擂鉢状を呈する。ピットは第1～2造構面同様、深さ20cm以内のものが大半を占め、その機能は不明である。ただし、深さ30cm以上のピット、Pit5・9は建物の一部であった可能性がある。第2造構面検出造構からは、縄文土器、土師器、韓式系軟質土器、須恵器片、棒状土錐が出土したが、いずれも小片で造構の時期を断定できない。Pit12から縄文土器片と古墳時代の棒状土錐が出土していることも上記を裏付ける。

第3造構面は平成15年度調査区の第3造構面に対応し、古墳時代と考えられる。ピット34基、土壙1基を検出した。A調査区ではピットを1基検出したのみで、造構はB・C調査区に集中している。ピットの形状は第1・2造構面同様のものが多く、柱穴としての機能を想定することは困難である。SK1は平面形が

不整形で断面形状は浅い擂鉢状を呈する。これらの遺構からは土師器、須恵器の小片が出土しているが、小片のため遺構の時期を断定できない。なお、Pit14からは瓦質土器、Pit16からは鉄釘が出土したが、いずれも第1遺構面の遺構に切られているため、混入したものと考えられる。

【註】

- 横山成己(2005)「第1章第6節、教育学部附属光小学校エレベーター昇降路他新設に伴う試掘・立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口

(3) D調査区

a. 基本層序(図82・写真129)

D調査区は附属小学校校舎北東側に位置する。基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(アスファルト 層厚約6~12cm)
- 第2層 造成土(層厚9~25cm)
- 第3層 第1遺構面形成層(層厚4~25cm)
- 第4層 第2遺構面形成層(層厚3~18cm)
- 第5層 第3遺構面形成層(層厚4~16cm)
- 第6~15層 第3遺構面形成以前の堆積層(層厚91cm以上)

第3層は第3~1層、第3~2層に細分される。第3~1層は第1遺構面形成層である。第3~2層は平成15年度調査区の第2層に対応する層と考えられる。第4層は第4~1層、第4~2層に細分され、第5層は第5~1層、第5~2層に細分される。第6~15層は調査区北西部で一部を検出したのみであるが、検出した範囲ではほぼ水平に堆積していた。第1~3遺構面はA~C調査区と対応する遺構面である。

b. 遺構(図82~85・写真131~139)

第1遺構面では、ピット4基、溝1条、不明遺構2基を検出した。ピットの平面形には梢円形のもの(Pit1・2・4)と円形のもの(Pit3)がある。深さはいずれも10cm未満である。Pit1からは瓦片、Pit3からは土師器、須恵器片が出土した。SD1の底面には拳大の石を敷き詰められており、暗渠と考えられる。土師器、磁器、瓦片が出土した。不明遺構SX1・2は長軸方向がSD1と一致することから、SD1よりも古い溝の残欠である可能性がある。

第2遺構面では、ピット4基、土壤1基、不明遺構1基を検出した。検出面となった第4~1層はオーリーク黑色粗砂を斑状に含むため、遺構検出が困難であった。ピット4基はいずれも礎石を有していたが、埋土が第3~2層とほぼ同一であったことから、同層から掘り込まれた遺構であった可能性が高い。SX1は南北方向に長軸を持つ落ち込みで、土師器、須恵器片が出土した。SK1はSX1を切るが、深さはわずか2cmであった。

第3遺構面では、ピット16基、土壤2基、不明遺構3基を検出した。ピットの平面形はPit4・15が円形で他は梢円形である。Pit2・5・16・SX2はSX1の上面から掘り込まれていた。Pit16以外は深さ20cm以内であった。これらのピット埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、いずれも小片である。SK1は全体を検出していないが、平面形が隅丸方形とみられる。深さは30cmで土師器、須恵器片が出土した。SK2は排水管及びSX3に切られているため、平面形は不明である。深さ9cmで埋土上面から竈形土器片が出土した。SX1の平面形は東西方向から南北方向に曲がるL字状を呈する。上面遺構及びPit2・5・16・SX2に切られているため、残存状況は悪いが、深さは最深部で48cmである。底面レベルはc-d間が標高2.44m、e-f間が2.66mで北西側が低い。埋土から繩文土器、弥生土器、土師器片が出土した。

光橋内(御手洗遺跡・月持山遺跡)の調査

1 アズカルト

2-1 透成土 バラス

2-2 透成土 にぶい 黄褐色 (10YR4/3) 粗砂 バラス含む

3-1 淡白色 (2.5Y7/1) 粗砂 0.5 ~ 1cm大の礫含む

3-2 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 0.5 ~ 12cm大の礫含む

3-3 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 0.5 ~ 3cm大の礫含む

3-4 黑褐色 (2.5Y4/1) 粗砂 反覆含む

3-5 墓灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂 反覆含む

3-6 にぶい 黄色 (2.5Y6/3) 粗砂 0.5 ~ 1cm大礫を少量含む

3-7 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 3 ~ 3L付り, 0.5 ~ 3cm大の礫を多く含む

3-8 黄褐色 (2.5Y5/3) 粗砂 フラクタルに風化を帯びる。0.5 ~ 3cm大の礫含む

3-9 黑色 (10YR4/4) 粗砂 0.5 ~ 5cm大の礫を含む

4-1 にぶい 黄褐色 (10YR5/4) 粗砂

4-2 にぶい 黄褐色 (10YR5/4) 明黄褐色 (10YR6/6) 黒褐色 (7.5YR3/2) 粗砂 のブロック砂 0.5 ~ 3cm大礫含む

4-3 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫を多く含む

4-4 灰岩 (5W/1) 砂 明黄褐色 (2.5Y6/6) 粗砂を少量含む

5-1 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫を含む 黑褐色 (7.5YR3/2)

粗砂を斑状に含む

5-2 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫を含む 黑褐色 (7.5YR3/1)

粗砂を斑状に含む (5-3よりも多い)

5-3 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 0.5 ~ 4cm大礫を含む 黑褐色 (7.5YR3/1)

粗砂を斑状に含む

6 黑褐色 (7.5YR3/2) 粗砂 2 ~ 3cm大礫を多く含む

7 黑褐色 (7.5YR3/2) 粗砂 2 ~ 3cm大礫を少く含む

8 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗砂と黒褐色 (7.5YR3/2) 粗砂のブロック砂

9 明黄褐色 (10YR7/6) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫を含む 黑褐色 (7.5YR3/1) 粗砂

斑状に含む

10 黃褐色 (10YR5/2) 砂 0.5 ~ 1cm大礫主体 粗砂含む

11 灰岩 (2.5Y7/2) 粗砂 0.5 ~ 2cm大の礫を少く含む

12 淡白色 (2.5Y7/2) 粗砂 0.5 ~ 2cm大の礫を少く含む

13 にぶい 黄褐色 (10YR7/2) 粗砂 0.5 ~ 2cm大礫含む 黑褐色 (7.5YR3/1) 粗砂

斑状に含む

14 15.5% 黄褐色 (10YR6/3) 砂 0.5 ~ 1cm大礫主体 粗砂含む

15 黄色 (2.5Y8/3) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む

16 にぶい 黄褐色 (10YR5/3) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む 黑褐色 (7.5YR3/1) 粗砂

斑状に含む

17 にぶい 黄褐色 (10YR5/3) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む

18 从白色 (10YR8/2) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む

19 从白色 (10YR8/1) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む 黑褐色 (7.5YR3/1) 粗砂

斑状に含む

20 深黄色 (2.5Y8/4) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む 黑褐色 (10YR3/2) 粗砂

斑状に含む

21 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粗砂 0.5 ~ 3cm大礫含む

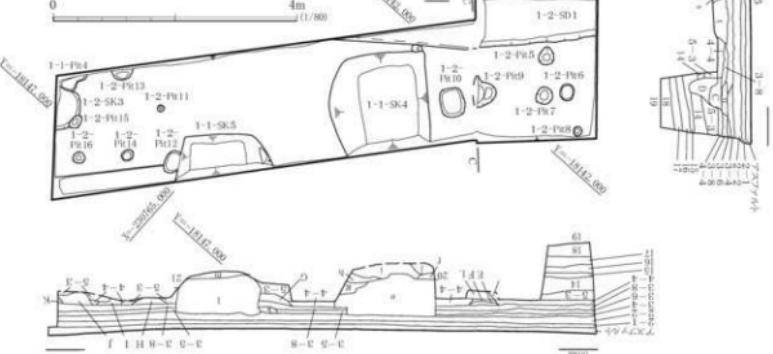


図 77 A~C調査区第1遺構面平面図・土層断面図

- a 1-1-SK1埋土 噴灰黄色 (2.5V4/2) 粗砂 コンクリート片を含む
 b 1-1-SK1埋土 噴灰黄色 (2.5V4/2) 粗砂
 c 1-1-道構造土 噴灰黄色 (2.5V4/2) 粗砂
 d 1-1-SK3埋土 噴灰黄色 (2.5V4/1) 粗砂 黒褐色 (2.5V3/1) 粗砂・レンガ片・炭を含む
 e 1-1-SK4埋土 黒色 (2.5V2/1) 粗砂 噴灰黄色 (2.5V4/2) 粗砂 5-3-29-1のブロック砂
 f 1-1-SK4埋土 20と同じ
 g 1-1-SK4埋土 5-3同じ
 h 1-1-SK4埋土 噴灰黄色 (2.5V4/2) 粗砂 0.5~3cm大礫を多く含む 黒褐色 (10VR3/2) 粗砂を斑状に含む
 i 1-1-SK4埋土 にぶい・黄褐色 (10VR7/2) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 j 1-1-SK4埋土 にぶい・黄褐色 (10VR7/2) 粗砂 0.5~1cm大礫を含む
 k 1-1-道構造土 噴灰黄色 (2.5V5/2) 粗砂
 l 1-1-SK5埋土 黒 (2.5V5/1) 砂 及び繊維を含む
 m 1-1-SK5埋土 黄褐色 (2.5V5/4) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む 黑褐色 (10VR3/2) 粗砂を斑状に含む
 n 1-2-PH1埋土 にぶい・黄褐色 (2.5V1/3) 粗砂 0.5~1cm大礫を少數含む
 o 1-2-SK1埋土 灰色 (5V6/1) 繊維に噴灰褐色 (10VR5/2) 粗砂を少數含む
 p 1-2-道構造土 にぶい・黄褐色 (10VR5/4) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 q 1-2-道構造土 細色 (10VR4/4) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 r 1-2-道構造土 黑褐色 (10VR3/1) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 s 1-2-道構造土 にぶい・黄褐色 (10VR5/4) 粗砂 P-26.0 0.5~3cm大礫を多く含む
 t 1-2-SD1埋土 黄褐色 (2.5V1/3) 繊維に 20cm 大の円錐を含む
 u 1-2-道構造土 噴灰黄色 (2.5V5/2) 粗砂
 A 第2道構面道構造土か 噴灰黄色 (2.5V6/2) 粗砂 0.5~2cm大礫を含む
 B 第2道構面道構造土か 黄褐色 (2.5V6/3) 粗砂 0.5~2cm大礫を少數含む
 C 第2道構面 PH9埋土 黒褐色 (10VR1/1) 粗砂に4~4を斑状に含む
 D 第2道構面 PH9埋土 5-3と15のブロック砂
 E 第2道構面道構造土 黑褐色 (2.5V3/1) 粗砂に4~4を斑状に含む
 F 第2道構面道構造土 黄色 (2.5V8/6) 粗砂 0.5~2cm大礫を含む
 G 第2道構面道構造土 オリーブ褐色 (2.5V4/3) 粗砂
 H 第2道構面道構造 PH10埋土 噴灰黄色 (2.5V4/2) 埋土 0.5~3cm大礫を含む
 I 第2道構面道構造 PH10埋土 黑褐色 (2.5V3/1) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 J 第2道構面 SK4埋土 黑褐色 (2.5V3/2) 粗砂 0.5~3cm大礫を含む
 K 第2道構面 SK4埋土 にぶい・黄褐色 (10VR5/3) 粗砂 3~5cm大礫を多く含む
 L 第3道構面 PH5埋土 黑褐色 (2.5V3/1) 粗砂 0.5~3cm大礫を多く含む

SX2はSX1を切っている。一部の検出にとどまったため、平面形は不明である。深さは88cmで、埋土は4層に分かれ、最上層以外の層は北西方向から南東方向に傾斜する。これらの層から土師器片が出土した。

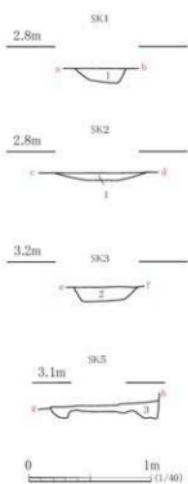
(4) E~G調査区

a.基本層序(図86・87・写真140~142)

E~G調査区は附属小学校北西側に位置する。基本層序は下記の通りである。

- 第1層 表土(アスファルト 層厚約7~9cm)
 第2層 造成土(層厚11~75cm)
 第3層 第1道構面形成層(層厚4~39cm)
 第4層 第2道構面形成層(層厚5~36cm)
 第5層 第3道構面形成層(層厚2~50cm)
 第6~12層 第3道構面形成以前の堆積層(層厚40cm以上)

E調査区は南西端を除く全面が擾乱を受けていた。第1~第3道構面はA~D調査区の道構面と対応すると考えられる。また、検出標高から第2道構面は平成2年度調査の附属小学校運動場改修工事に伴う発掘調査(以下平成2年度調査区)の第1道構面、第3道構面は同第2道構面との対応が考えられる。



- 1 淡黄色 (10YR5/2) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
- 2 淡黄色 (10YR4/2) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
- 3 黒褐色 (2.5Y3/1) 粗砂 1~3cm大礫多く含む

図 79 SK1・2・3・5土層断面図

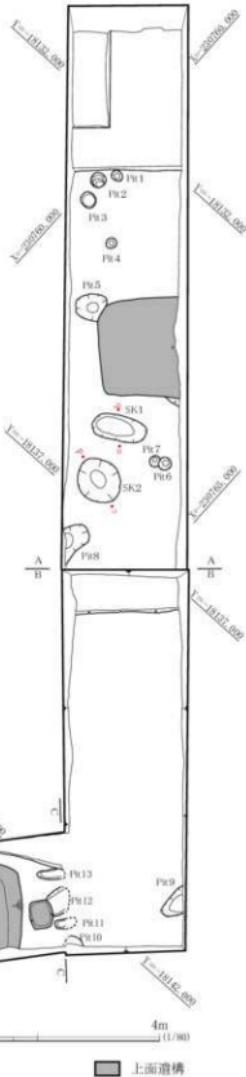


図 78 A~C調査区第2遺構面平面図



図 81 SK1 • Pt11 土層断面図

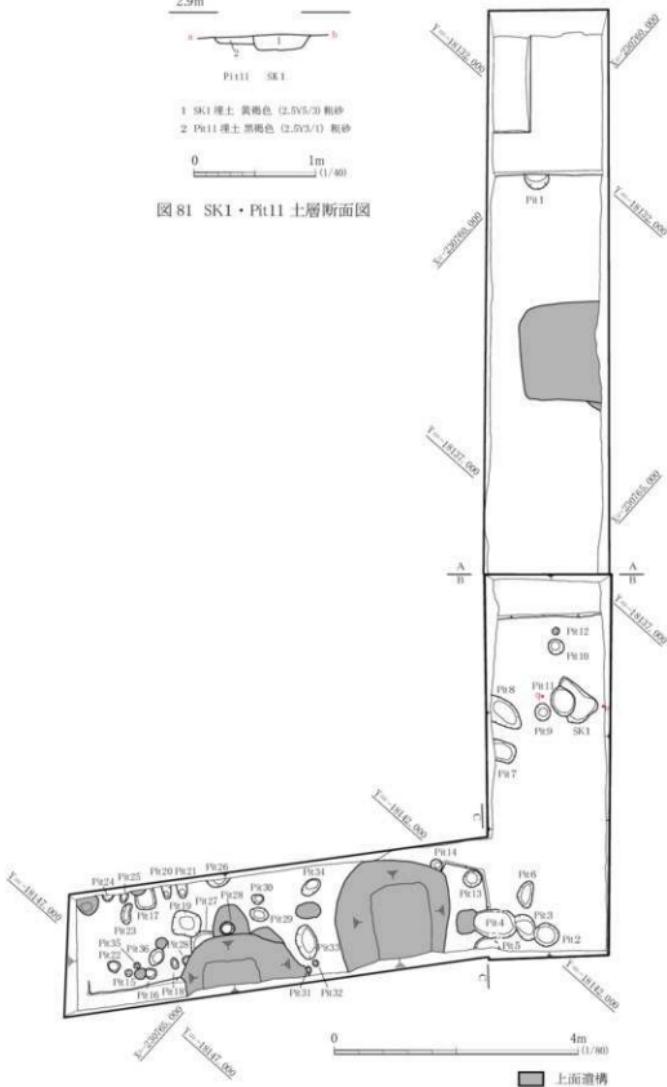


図 80 A~C調査区第3遺構面平面図

- 1 アスファルト
 - 2-1 造成土 バラス
 - 2-2 造成土 にぶ・黄褐色 (10YR4/3) 粗砂 バラス含む
 - 3-1 にぶ・黄色 (2,5Y6/3) 粗砂 0.5~1cm大礫を少々含む
 - 3-2 褐色 (10YR4/4) 粗砂 0.5~5cm大礫を含む
 - 4-1 土オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂にオーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂 を斑状に含む
 - 4-2 オーブ黒色 (7,5Y3/2) 粗砂 1~3cm大礫を含む 部分的に
灰オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂含む
 - 4-3 黄褐色 (2,5Y5/3) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
 - 5-1 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 0.5~4cm大礫を含む 黑褐色 (7,5Y3/1)
粗砂を斑状に含む
 - 5-2 5-11 黄灰色 (2,5Y4/1) 粗砂を斑状に含む 1~3cm大礫含む
 - 6 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂 0.5~1cm大礫主体
 - 7 黄色 (5Y7/6) 粗砂 1~3cm大礫主体
 - 8 オーブ色 (5Y5/6) 粗砂 0.5~3cm大礫主体
 - 9 土白色 (2,5Y8/1) 粗砂 0.5~3cm大礫含む。
 - 10 淡黄褐色 (2,5Y6/2) 粗砂 0.5~1cm大礫
 - 11 土オーブ色 (5Y5/2) 粗砂 0.5~2cm大礫含む
 - 12 灰白色 (5Y7/2) 粗砂 0.5~3cm大礫多く含む
 - 13 黄色 (5Y7/6) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
 - 14 土オーブ色 (5Y4/2) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
 - 15 浅黄色 (5Y7/2) 粗砂 0.5~2cm大礫含む
- a 第1遺構SD1埋土 にぶ・黄褐色 (10YR5/3) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
高径 20 cmの円錐形を含む
- b 第2遺構SK1埋土 にぶ・黄褐色 (10YR5/3) 粗砂 0.5~3cm大礫含む
- c 第3遺構面 Pn2埋土 淡灰色 (10YR4/1) 粗砂 0.5~1cm大の礫含む
- d 第3遺構面 SK1埋土 オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂 0.5~1cm大の礫含む
- e 第3遺構面 SK2埋土 オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂 (1~3cm大礫含む) に
灰オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂を含む
- f 第3遺構面 SK2埋土 オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂 (1~3cm大礫含む) に
灰オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂を少量含む
- g 第3遺構面 SK2埋土 土オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂 (1~3cm大礫含む) に
オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂を少含む
- h 第3遺構面 SK2埋土 明黄褐色 (7,5Y7/6) 粗砂 (1~3cm大礫含む) に
オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂を少含む
- i 第3遺構面 SK1埋土 オーブ黒色 (7,5Y3/2) 粗砂 (1~3cm大礫含む)
- j 第3遺構面 SK1埋土 土オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂 (1~3cm大礫含む) に
灰オーブ色 (7,5Y4/2) 粗砂を含む
- k 第3遺構面 SK2埋土 5-11 黑褐色 (2,5Y3/1) 粗砂を少含む (1~3cm大礫含む)
- l 第3遺構面 Pn14埋土 オーブ黒色 (7,5Y3/1) 粗砂 1~3cm大礫含む
- m 第3遺構面 Pn1埋土 土オーブ色 (7,5Y3/2) 粗砂 1~3cm大礫含む

図82 D調査区第1遺構面平面図・土層断面図

第3層は第3-1層、第3-2層に細分される。第3-1層はG調査区でのみ検出された。現在の校舎以前に存在した木造校舎に伴う遺構面形成層と考えられる。第3-2層は第1遺構面形成層である。第4層はE調査区南西端からG調査区北東部にかけてみられ、G調査区南西部では第3-2層に切られて消失している。第5層は第5-1~5層に細分される。このうち、遺構が検出されたのは第5-2・4・5・7層上面で、他については、検出標高・切り合いから第3遺構面形成層と考えられる。

b. 遺構(図87~93・写真143~161)

第1遺構面では、Pit8基、土壤6基、不明遺構1基を検出した。ピットのうち、Pit5は深さ43.6cm、Pit6は深さ28.3cmで、他よりも深く、柱状の立石が認められた。立石の機能は不明であるが、何らかの区画を意図したものと推測される。また、Pit7は上部を擾乱により削平されており、同理土を除去した段階で検

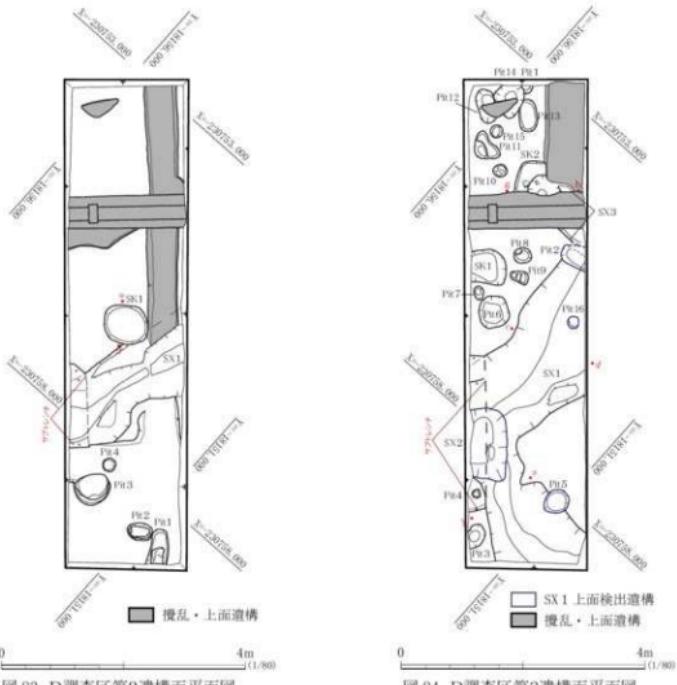


図 83 D調査区第2遭構面平面図

図 84 D調査区第3遭構面平面図

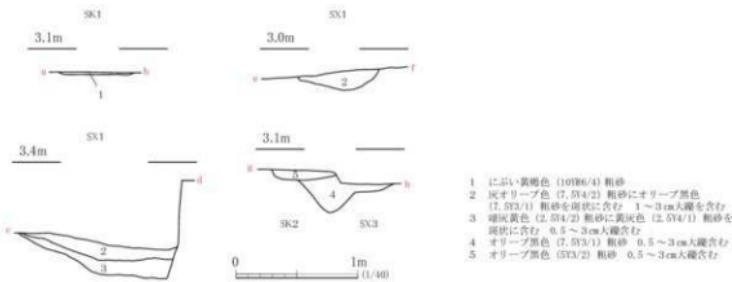
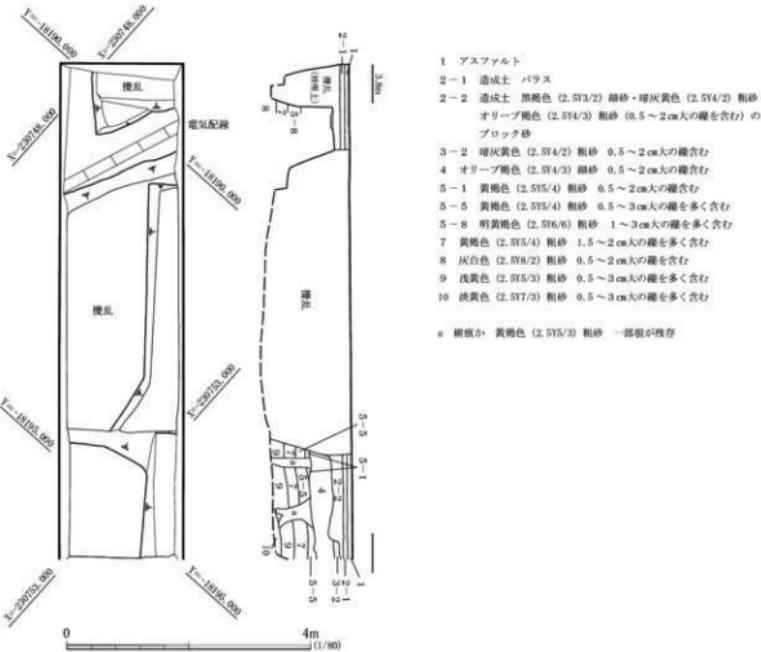


図 85 D調査区第2遭構面・第3遭構面検出遭構断面図



出された。埋土には同一個体とみられる土師質土器、瓦質土器片が多数含まれており、それらの特徴から、Pit 7は近世(18世紀後半~19世紀)の遺構と考えられる。土壤のうち、SK1~4は底面に拳大の石を敷き詰めていた。また、軸方向が一致しており、建物の一部であった可能性がある。中心を基準としたSK1~2間の距離は約200cm、SK3~4間の距離は約240cm、SK1~3間の距離は約200cm、SK2~4間の距離は約200cmである。SK5は楕円形で深さ12cm。土師器片が出土した。SK6は不整形で深さ11.7cm。須恵器片が出土した。SX1は不規則な形状で、深さ4.9cmである。樹痕の可能性が高い。

第2遺構面では、ピット1基を検出した。給水管・攪乱に切られていたため、全体を検出できなかつたが、平面系は楕円形と考えられる。深さは20cmで、埋土は炭を含む灰黄褐色(10YR4/2)粗砂の単一層であった。埋土上面では竈形土器を検出し、埋土中位~下位にかけても上面出土と同一とみられる竈形土器片のほか、土師器甕が出土した。共に使用痕が認められることから、使用後に廃棄されたと考えられる。6世紀頃に位置づけられよう。

光橋内(新平添道路・月持山道路)の調査

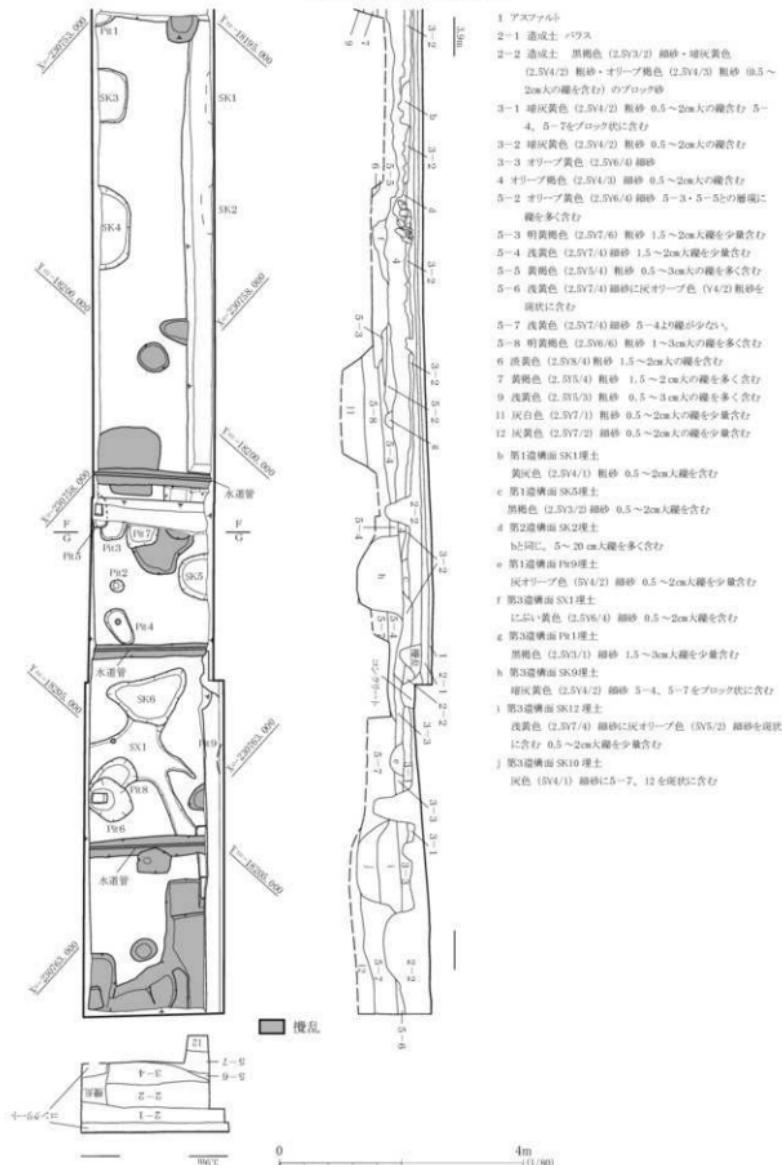


図 87 F・G調査区第1道構面平面図・土層断面図

元横内(御手洗道路・月持山道路)の調査

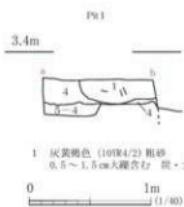


図 89 F調査区
第2遺構面 Pit1断面図

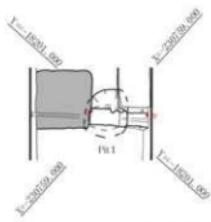


図 88 F調査区第2遺構面
平面図・断面図

1 第3道表面形成長
淡黄色 (2.5Y7/4) 粗砂
0.5~3cmの大網を含む
明黄色 (2.5Y7/6) 細砂
1.5~3cmの大網を多く含む
SK1 土壌 (2.5Y8/2) 黑色 (2.5N1/1)
細砂を表面に含む
4 SK1 土壌
2 同じ
SK1 土壌
にふる黄色 (2.5Y6/4) 細砂
0.5~2cmの大網を少しある
SK1 土壌
にふる黄色 (2.5Y6/3) 細砂
0.5~2cmの大網を少しある
P1 土壌
6 黑褐色 (2.5N3/1) 細砂を表面に含む
P1 土壌
7 黑褐色 (2.5N3/1) 細砂を表面に含む
SK2 土壌
淡黄色 (2.5Y7/4) 粗砂に埋め黄土色 (2.5Y5/1)
粗砂を含む、1.5~3cm大網を含む

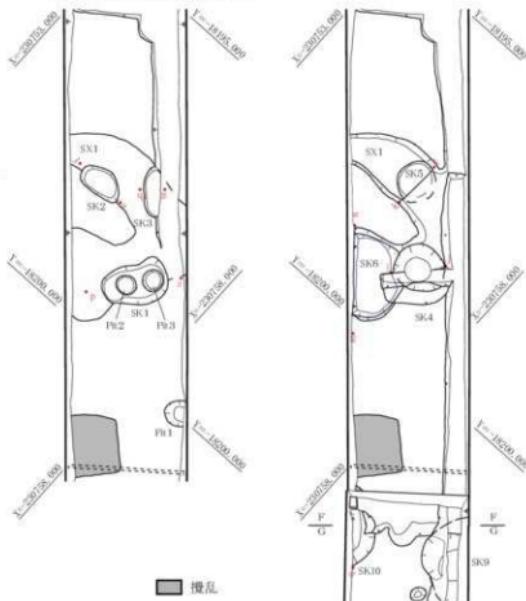


図 90 F調査区第3遺構面
平面図1

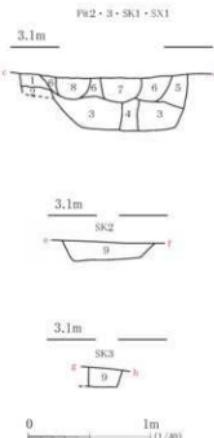


図 92 E調査区第3遺構面断面図

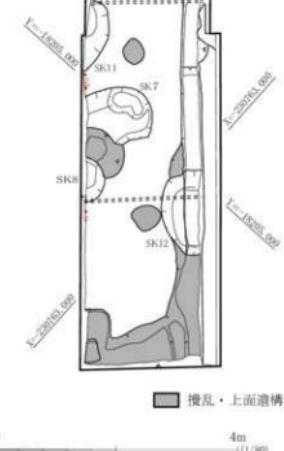
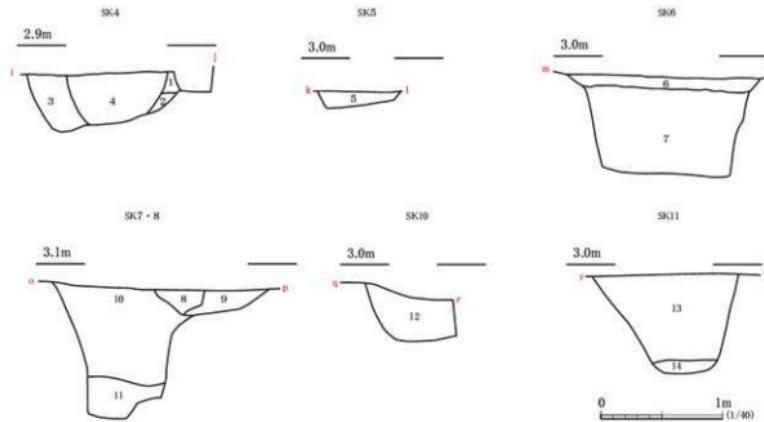


図91 F調査区第3遺構面平面図2
・G調査区第3遺構面平面図



- 1 第3遺構面形成層 黄褐色 (2.5Y5/0) 細砂 0.5~3cm 大礫を多く含む
- 2 灰色 (2.5Y7/0) 細砂 0.5~2cm 大礫を含む
- 3 第3遺構面SK4埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂を斑状に含む 0.5~1.5cm 大礫を少量含む
- 4 第3遺構面SK4埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 黒褐色 (2.5Y3/1) 細砂を斑状に含む 0.5~1.5cm 大礫を少量含む
- 5 第3遺構面SK5埋土 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂と喀灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂を斑状に含む 0.5~1.5cm 大礫を少量含む
- 6 第3遺構面SX1埋土 にじみ黄色 (2.5Y6/1) 細砂 0.5~2cm 大礫を含む
- 7 第3遺構面SX1埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 0.5~1.5cm 大礫を含む
- 8 第3遺構面SX1埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 0.5~1.5cm 大礫を含む
- 9 第3遺構面SX1埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 0.5~1.5cm 大礫を含む
- 10 第3遺構面SK8埋土 喀灰黄色 (2.5Y4/2) 細砂
- 11 第3遺構面SK8埋土 灰黄色 (2.5Y6/2) 細砂 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂を斑状に含む 0.5~2cm 大礫を含む
- 12 第3遺構面SK10埋土 黒褐色 (2.5Y4/1) 細砂 喀灰黄色 (2.5Y6/3) 細砂を含む 0.5~2cm 大礫を少量含む
- 13 第3遺構面SK11埋土 土 10と同じ
- 14 第3遺構面SK11埋土 喀灰黄色 (2.5Y5/2) 細砂 0.5~2cm 大礫を少量含む

図 93 F調査区第3遺構面断面図2

第3遺構面ではピット4基、土壤12基、不明遺構1基が検出された。

F調査区ではSK1~3を完掘後、周辺が遺構面よりもわずかに色調・土質が異なっていたため、清掃した結果、SX1を検出した。平面形からSK1~3はSX1を切っていたと考えられる。また、SK1を切るPit2・3があるが、埋土が共に黒褐色(2.5Y3/1)細砂であることから、柱根であった可能性がある。さらにSX1を完掘後、底面からSK4~6を検出した。このうち、SK5の南半部はSX1埋土と共に掘削してしまったため、北半部のみ検出した。上記の遺構のうち、SX1・SK1・3・5・6から土器が出土しているが、いずれも小片で時期を断定できない。切り合い関係から、SK4・5・6→SX1→SK1~3の順序が考えられ、平面形からSX1はSK4~6埋没後の整地に伴うものであった可能性がある。

G調査区では、Pit4・SK7~12を検出した。土壤はすべて一部の検出にとどまったが、SK7が深さ19cmであるのを除くと、すべて40cmを超えており、最も深いSK8で108cmである。層序は單一ないし2層である。埋土からは土師器、須恵器の小片が出土しているが、小片で時期を断定できない。以上から不明な点が多いものの、楕円形の可能性がある平面形と深さから、掘立柱建物の一部であった可能性がある。

【註】

- 3) 河村吉行(1992)「第3章 光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口

- 1 表土 (マサ土)
- 2-1 造成土 (コクス)
- 2-2 造成土 (マサ土)
- 2-3 造成土 (ハラス)
- 2-4 造成土 (マサ土)
- 2-5 灰色 (SY4/1) 粗砂 5cm 大繊、ガレキ含む
- 3 喙灰黄色 (2.SV4/2) 粗砂 ~1cm 大繊を多く含む
- 4 黒褐色 (2.SV3/2) 繩 1~2cm 大繊主体 粗砂を少許含む
- 5 喙灰黄色 (2.SV4/2) 粗砂・粗砂・繩 (1~2cm 大) の互層
※下部 5~8cm は繩
- 6 喙灰黄色 (2.SV4/2) 粗砂・粗砂・繩 (1~2cm 大) の互層
※下部 5~8cm は繩 上面は厚 4~6cm の粗砂 上面でビット検出
- 7 喙灰黄色 (2.SV4/2) 繩 8~10 と一連の堆積 1~2cm 大繊主体
- a SK1 墓土
オリーブ黒色 (SY3/1) 繩 1~2cm 大繊主体 粗砂を少量含む
- b SK1 墓土
喙灰黄色 (2.SV4/2) 繩 8 と一連の堆積 1~2cm 大繊主体

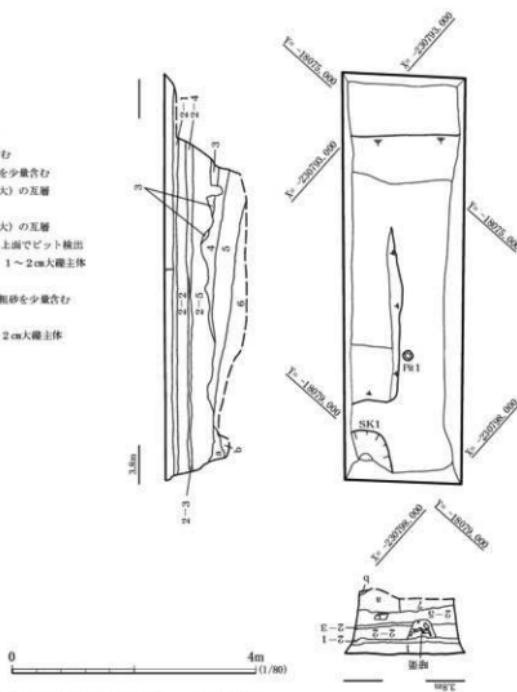


表9 A～C調査区第1遭構面遭構観察表

種類	遭構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	1-1-Pt1	楕円形	35×40	約15	瓦	
	1-1-Pt2	円形	径38	15.4		
	1-1-Pt3	楕円形	18×30	15.4		
	1-1-Pt4	不整形か	不明×50	19.7	土師器、須恵器、瓦質土器	
	1-1-Pt5	楕円形か	不明×34	28.2		
	1-2-Pt1	円形か	不明×不明	16.0		
	1-2-Pt2	楕円形	35×50	4.0	土師器	
	1-2-Pt3	円形	径13	5.0		
	1-2-Pt4	楕円形か	23×不明	2.6		
	1-2-Pt5	楕円形	25×29	8.2	土師器	
	1-2-Pt6	楕円形	23×28	14.0		
	1-2-Pt7	楕円形	26×29	12.6		
	1-2-Pt8	円形	径15	10.9		
	1-2-Pt9	不整形	52×約38	16.5		
	1-2-Pt10	隅丸長方形	40×48	3.4		
	1-2-Pt11	円形	径20	2.7		
	1-2-Pt12	楕円形	約28×38	17.2		
	1-2-Pt13	楕円形	17×20	21.7		
	1-2-Pt14	楕円形	16×25	13.3		
	1-2-Pt15	円形	径20	6.3		
	1-2-Pt16	楕円形	13×20	15.2		
	1-2-Pt17	円か	26×不明	17.2		辯押か
土壤	1-1-SK1	不明	不明	約10		未掘
	1-1-SK2	方形	(123)×170	72以上	コンクリート片	
	1-1-SK3	円形か	不明	約10		未掘
	1-1-SK4	不整形	73×(64)	30.0	土師器	
	1-1-SK5	不整形	(125)×(150)	86.0	須恵器、瓦質土器、磁器、陶器、碇(以上、抽出遺物)	
	1-1-SK6	不整形	(65)×(112)	70.0	須恵器、陶器、磁器、碇、骨製箆ブラシ(以上、抽出遺物)	
	1-2-SK1	円形か	74×不明	60.0		
	1-2-SK2	方形か	(54)×(67)	10.0	土師器、瓦	
	1-2-SK3	円形か	(37)×(67)	16.0	繩文土器、土師器、瓦質土器	
溝	1-2-SD1		90×(469)	25.0	土師器、須恵器	石敷暗渠

表10 A～C調査区第2遭構面遭構観察表

種類	遭構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	Pt1	楕円形	16×20	9.8	土師器	
	Pt2	円形	径25	20.5		
	Pt3	楕円形	24×27	13.3		
	Pt4	楕円形	16×19	3.6		
	Pt5	楕円形	42×50	38.6	土師器	
	Pt6	円形	径21	12.6		
	Pt7	円形	不明×19	16.6		
	Pt8	不整形	39×不明	20.1	土師器	
	Pt9	楕円形か	34×不明	52.0		
	Pt10	円形か	不明×不明	8.0		
	Pt11	楕円形	16×約36(推定)	6.7	土師器、須恵器	
	Pt12	楕円形	38×不明	11.2	繩文土器、土鍬	
	Pt13	楕円形	18×40(推定)	11.6		
	Pt14	楕円形	32×46	11.0		
	Pt15	楕円形	21×29	8.1		
	Pt16	楕円形	25×35	27.8	土師器	
	Pt17	楕円形	27×33	10.7	土師器	
	Pt18	楕円形か	不明×不明	19.6	土師器	
土壤	SK1	楕円形	41×89	11.0		第1遭構面遭構か
	SK2	楕円形	63×73	6.0	磁器、土師質土器	第1遭構面遭構か
	SK3	不整形	59×(63)	12.2	土師器、朝鮮系軸質土器	
	SK4	楕円形	(55)×(101)	21.0		
	SK5	楕円形	(95)×(110)	18.0	土師器	

表11 A～C調査区第3造構面造構観察表

種類	造構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	Pit1	円形か	不明×40	15.2	土師器	
	Pit2	円形	径38	5.7	土師器	
	Pit3	楕円形	不明×44	8.5		
	Pit4	楕円形	45×不明	18.6	土師器	
	Pit5	円形か	不明×不明	15.0		
	Pit6	楕円形	24×45	9.0	土師器	
	Pit7	楕円形か	34×不明	5.8	土師器、須恵器	
	Pit8	楕円形か	40×不明	14.1	土師器、須恵器	
	Pit9	楕円形	24×29	7.4		
	Pit10	円形	径25	11.6		
	Pit11	楕円形	40×50	14.0	土師器	
	Pit12	円形	径12	15.0		
	Pit13	楕円形	26×29	14.0		
	Pit14	円形か	20×不明	7.8	瓦質土器(混入)	
	Pit15	円形	径11	3.1	土師器	
	Pit16	楕円形	16×不明	15.0	鉄釘(混入)	
	Pit17	楕円形	33×不明	5.2	土師器	
	Pit18	楕円形	12×19	3.4	土師器	
	Pit19	圓丸方形	40×48	4.1	土師器	
土壌	Pit20	楕円形	15×不明	13.6	土師器	
	Pit21	楕円形	15×不明	36.8	土師器	
	Pit22	楕円形	19×22	5.6		
	Pit23	楕円形	13×35	7.4		
	Pit24	円形か	18×不明	7.0		
	Pit25	楕円形	13×不明	9.4		
	Pit26	楕円形か	不明×不明	10.6		
	Pit27	不明	不明×不明	21.4		
	Pit28	楕円形	20×23	4.1		
	Pit29	楕円形	22×31	9.5		
	Pit30	楕円形	16×20	13.4		
	Pit31	楕円形	不明×12	8.5		
	Pit32	円形	径10	7.0		
	Pit33	楕円形	34×56	15.5		
	Pit34	楕円形	22×36	16.0		
SK1	SK1	不整形	54×110	42.0	土師器	

表12 D調査区第1造構面造構観察表

種類	造構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	Pit1	不整形	40×59	9.2	瓦	
	Pit2	楕円形	15×26	3.9		
	Pit3	不整形	37×39	9.0	土師器、瓦質土器	
	Pit4	楕円形	36×60	8.4		
溝	SD1		58×810	18.2	土師器、磁器、瓦	石敷暗渠
	SX1	不整形	45×160	6.7	土師器、瓦	溝の残欠か
	SX2	不整形	33×69	13.2	土師器、須恵器、陶器、瓦質土器、瓦	溝の残欠か

表13 D調査区第2造構面造構観察表

種類	造構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	Pit1	楕円形	29×不明	13.8		建石右 第3～2番 検出面造構か
	Pit2	楕円形	29×41	4.7		建石右 第3～2番 検出面造構か
	Pit3	円形か	59×不明	5.1	土師器	建石右 第3～2番 検出面造構か
	Pit4	円形か	径22	8.6		建石右 第3～2番 検出面造構か
土壌	SK1	楕円形	63×67	2.0		
	SX1		(116)×(215)	15.0	土師器、須恵器	SK1に切られる 第3造構面SX1を 切る
不明造構						

表14 D調査区第3造構面造構観察表

種類	造構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ビット	Pit1	不明	不明×不明	8.7	土師器	
	Pit2	楕円形	27×不明	11.3	土師器	SX1を切る
	Pit3	楕円形か	28×不明	4.9		
	Pit4	円形	径14	3.5		
	Pit5	楕円形	39×44	4.1		
	Pit6	楕円形	50×52	11.4		
	Pit7	楕円形	16×23	8.5		
	Pit8	楕円形	25×30	13.8		

第1調査区(御手洗遺跡・月待山遺跡)の調査

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ピット	Pit9	楕円形	22×32	6.8		
	Pit10	楕円形	20×22	5.3		
	Pit11	不整形	30×50	12.0	赤生土器、土師器	
	Pit12	楕円形	29×56	10.2		Pit14に切られる。
	Pit13	楕円形	30×54	2.6	土師器	Pit14に切られる。
	Pit14	楕円形	不明×不明	16.2		Pit12+13を切る。
	Pit15	円形	径20	20.7	土師器	
	Pit16	楕円形	16×19	43.2		
土壤	SK1	不整形か	(55)×(58)	30.0	土師器、須恵器	SX1を切る。
	SK2	不明	(50)×(50)	9.0	土師器	
不明遺構	SX1		(175)×(450)	48.0	陶文土器、赤生土器、土師器	第2遺構面P1～4、SX1、第3遺構面P9.2、5、16、SX2.3に切られる。
	SX2	圓丸方形か	(65)×(114)	88.0	土師器	SX1を切る。
	SX3	不明	不明×不明	28.0	土師器	第1遺構面P1.1、第3遺構面SX2.3に切られる。SX1、P9.2が切る。

表15 F・G調査区第1遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ピット	Pit1	不明	不明×不明	16.4	土師器、陶器、磁器	
	Pit2	楕円形	20×23	34.3		
	Pit3	圓丸方形か	38×不明	41.5		
	Pit4	楕円形	34×65	9.8	土師器	
	Pit5	楕円形	22×約45	43.6		立石
	Pit6	楕円形	60×73	82.3		立石
	Pit7	不整形	45×不明	20.0	土師器、土師質土器、瓦質土器	
	Pit8	楕円形か	不明×不明	35.9	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器	
土壤	SK1	圓丸方形か	(11)×(75)	29.0		石敷
	SK2	圓丸方形か	(17)×(100)	29.0		石敷
	SK3	圓丸方形か	87×(47)	26.8	土師器	石敷
	SK4	楕円形	85×(46)	28.0	土師器	石敷
	SK5	楕円形	77×(47)	12.0	土師器	
	SK6	不整形	(80)×132	11.7	須恵器	SX1を切る。 樹根か、SK6に切られる。
不明遺構	SX1	不整形		4.9	陶器、磁器	

表16 F・G調査区第2遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ピット	Pit1	楕円形か	不明×不明	20.0	土師器、須恵器	擾乱に切られる。

表17 F・G調査区第3遺構面遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ピット	Pit1	円形か	42×不明	23.9		
	Pit2	楕円形	30×34	17.0		
	Pit3	楕円形	32×36	20.0		
	Pit4	楕円形	22×28	11.0		
	SK1	楕円形	70×242	42.5	土師器、須恵器	
	SK2	楕円形	44×75	17.0		
	SK3	楕円形	(28)×83	16.0	土師器	
	SK4	楕円形	79×84	84.0		SK6を切る。
土壤	SK5	楕円形	約65×70	15.0	陶文土器	
	SK6	楕円形か	132×(77)	71.0	土師器、須恵器	SK4に切られる。
	SK7	楕円形か	(90)×(110)	19.0	土師器	
	SK8	楕円形か	(29)×(116)	107.0	土師器、須恵器	
	SK9	楕円形か	(60)×(145)	76.0		
	SK10	楕円形	(38)×(72)	47.0		
	SK11	楕円形か	(37)×(120)	81.0	土師器	
	SK12	楕円形か	(70)×(140)	72.0		
不明遺構	SX1		88×(180)	25.0	土師器	

表18 H調査区遺構観察表

種類	遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
ピット	Pit1	円形	直径15	10.3		
土壤	SK1	楕円形か	(50)×(65)	39.0	土師器	



写真109 A調査区南東壁土層断面(北から)



写真110 B調査区南端部土層断面(北から)



写真111 C調査区南西壁土層断面(東から)



写真112 A調査区第1遺構面(南東から)



写真113 B調査区第1遺構面検出状況(北東から)



写真114 B調査区第1遺構面完掘状況(北東から)



写真115 C調査区第1遺構面完掘状況(南東から)



写真116 A調査区第2遺構面完掘状況(北から)



写真117 C調査区第2遺構面検出状況(南東から)



写真118 C調査区北西部第2遺構面検出遺構半裁状況(南から)



写真119 A調査区第2遺構面SK1半裁状況
(南東から)



写真120 A調査区第2遺構面SK2半裁状況
(北から)



写真121 C調査区第2遺構面SK3半裁状況
(南西から)



写真122 A調査区第3遺構面検出状況(北東から)



写真123 B調査区第3遺構面遺構検出状況
(北東から)



写真124 B調査区第3遺構面完掘状況(北東から)



写真125 B調査区第3遺構面Pit11・SK1半截状況
(北東から)



写真126 C調査区第3遺構面検出状況(南東から)



写真127 C調査区第3遺構面完掘状況(南東から)



写真128 C調査区北西部第3遺構面検出遺構半截
状況(南から)



写真129 D調査区南西壁土層断面(東から)



写真130 D調査区作業風景(北から)



写真131 D調査区第1遺構面検出遺構半截状況
(南東から)



写真132 D調査区第2遺構面検出状況(南東から)



写真133 D調査区第2遺構面完掘状況(南東から)



写真134 D調査区第2遺構面SK1土層断面
(南西から)



写真135 D調査区第3遺構面検出状況(南東から)



写真136 D調査区第3遺構面完掘状況(南東から)



写真137 D調査区北西部第3遭構面検出状況
(東から)



写真138 D調査区第3遭構面SK1土層断面
(北東から)



写真139 D調査区第3遭構面SX1土層断面(南から)



写真140 E調査区南東壁土層断面(北から)



写真141 F調査区南西部南東壁土層断面(北西から)



写真142 G調査区南東壁土層断面(北から)



写真143 下調査区第1遭構面SK1~4半裁状況
(北東から)



写真144 G調査区南西部第1遭構面検出状況
(北東から)



写真145 G調査区北東部第1遺構面検出状況
(北東から)



写真147 G調査区第1遺構面完掘状況(北東から)



写真148 F調査区第2遺構面Pit1窓形土器出土状況
(北東から)



写真149 F調査区第2遺構面Pit1土層断面
(北東から)



写真150 F調査区第3遺構面完掘状況(北東から)



写真151 F調査区第3遺構面SK1~3半裁状況
(北東から)



写真152 F調査区第3遺構面SX1検出状況
(北東から)



写真153 F調査区第3遺構面SK4半裁状況
(南西から)



写真154 F調査区第3遺構面SK5半裁状況
(南から)



写真155 F調査区第3遺構面SK6検出状況
(南東から)



写真156 F調査区第3遺構面SK6土層断面
(南東から)



写真157 F調査区第3遺構面SK7・8土層断面
(南東から)



写真158 G調査区第3遺構面SK9土層断面
(北西から)

写真159 G調査区第3遺構面SK10土層断面
(南東から)写真160 G調査区第3遺構面SK11土層断面
(南東から)写真161 G調査区第3遺構面SK12土層断面
(北西から)

写真162 H調査区完掘状況 (東から)

(6) 本発掘調査出土遺物(図95~97・写真163~166)

a.B調査区出土遺物

1は第3-2・3・5層出土。須恵器壺蓋。2・3は第3-8層出土。2は縄文土器深鉢底部。後～晚期か。3は弥生時代前期の甕口縁部。4は第1遺構面検出時出土。陶質土器壺もしくは甕の胴部で、外面には縄蓆文タタキの後、2条の沈線、内面にナデを施す。5・6は第2遺構面Pit11出土。5は輪状つまみを持つ須恵器壺蓋。6は土師器甕の口縁部。7は第4-4層出土。縄文時代後期(磨消縄文系)の深鉢口縁部。口縁部内画面に2条の沈線を施す。また、口唇部と外面の沈線間にRLの縄文を施す。8は第3遺構面Pit8出土。外面に平行タタキ・カキメ、内面に同心円當て具痕が残る。

b.C調査区出土遺物

9・10は第1-2遺構面SK3出土。9は縄文時代晩期中葉(岩田IV類)の深鉢口縁～胴部。胴部外面に二枚貝条痕が残る。10は土師器塊底部。底面は糸切り。11・12は第2遺構面Pit12出土。11は縄文時代後期深鉢口縁部。12は棒状土錐。下端部を欠損するが、上下端部を穿孔する。¹¹13は第2遺構面SK3出土。韓式系軟質土器の甕もしくは鉢の胴部片。胴部外面に格子目タタキを施す。

c.D調査区出土遺物

14は第1遺構面SD1出土。磁器碗。18世紀の肥前系のくらわんか碗。外面に草花文を染め付ける。15・16は第1遺構面SX2出土。土師器皿。器壁が薄く硬質な焼成で底面は糸切り。近世と考えられる。16は須恵器甕口縁部。内外面にヨコナデを施す。17は第3-2層出土。韓式系軟質土器の甕もしくは鉢の胴部片。胴部外面に格子目タタキを施す。18は第3遺構面検出時出土。土師器竈形土器の基部。底部を

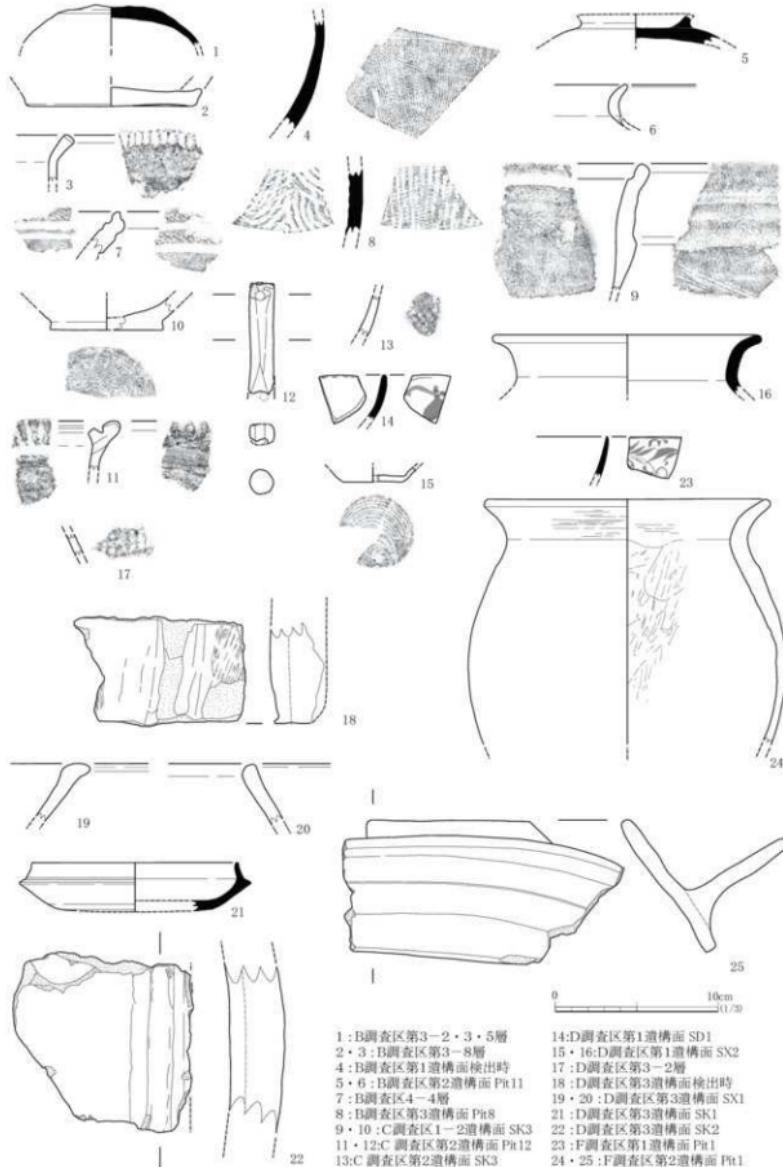


図 95 出土遺物実測図①

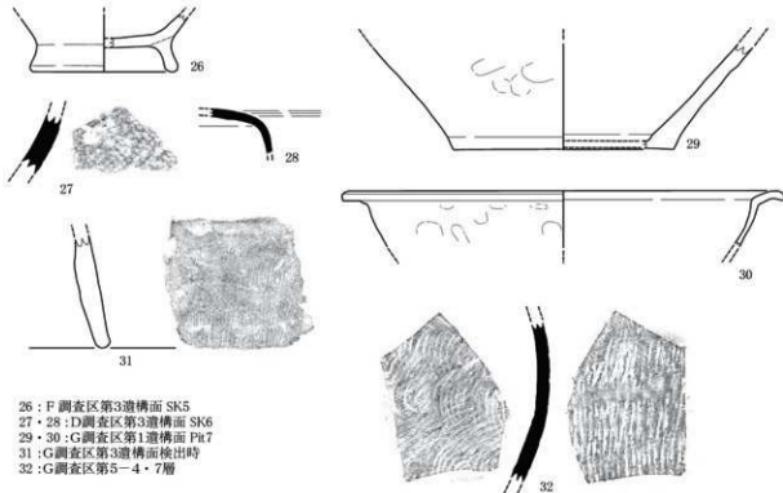


図 96 出土遺物実測図②

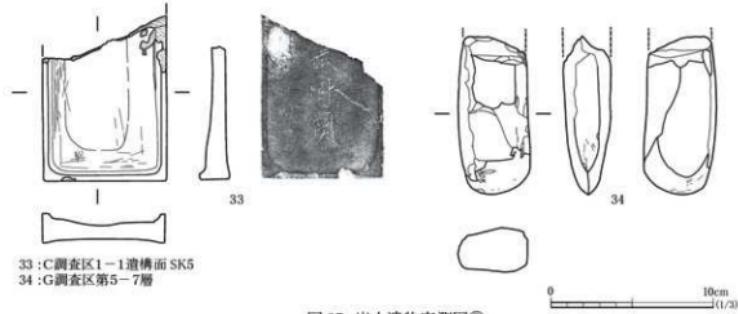


図 97 出土遺物実測図③

欠損する。19・20は第3遺構面SK1出土。19は縄文時代晩期の浅鉢口縁部。20は土師器竈形土器の掛口部。21は第3遺構面SK1出土。須恵器坏身。22は第3遺構面SK2出土。土師器竈形土器の基部付近で、把手の剥離痕がある。突帯は底の一部であろう。

d F調査区出土遺物

23は第1遺構面Pit1出土。18世紀後半の肥前系磁器碗。外面に草花文を染め付ける。24・25は第2遺構面Pit1出土。24は土師器甕。口縁部内外面にヨコナデ、胴部内面に下から上方向のケズリを施す。胴部にはススが付着する。25は土師器竈形土器の掛口～底部。外面にはススがわずかに残る。26は第3遺構面SK5出土。縄文時代後～晩期の深鉢底部。底部は貼り付けている。27・28は第3遺構面SK6出土。27は須恵器甕の胴部。焼成不良で外面に格子目タタキを施す。28は須恵器坏蓋。



写真 163 出土遺物①

光徳内(御平山遺跡・月持山遺跡)の調査



写真 164 出土遺物②

光徳内(御平山遺跡・月持山遺跡)の調査



写真 165 出土遺物③



写真 166 出土物④

表19 出土物(土器・土製品)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	B調査区 第3-2-3・5層	須恵器 坏蓋	天井部 ～脚部		①灰褐色(N5/0) ②灰褐色(N4/0)	0.1～5mmの砂粒を含む	機械掘削時出土
2	B調査区 第3-8層	繩文土器 深鉢	底部	②(10.6)	①灰褐色(5Y4/1) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1～3mmの砂粒を含む	
3	B調査区 第3-8層	弥生土器 瓢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.1～2mmの砂粒を含む	
4	B調査区 第1遺構面検出時	陶質土器 瓢	胴部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1～1mmの砂粒を含む	
5	B調査区 第2遺構面P911	須恵器 坏蓋	天井部		①②オリーブ黄色(5Y6/3)	0.1～3mmの砂粒を含む	
6	B調査区 第2遺構面P911	土師器 瓢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②黄色(2.5Y4/1)	0.1～2mmの砂粒を含む	
7	B調査区 第4-4層	繩文土器 深鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1～1mmの砂粒を含む	
8	B調査区 第3遺構面P918	須恵器 瓢	胴部		①②灰褐色(5Y6/1)	0.1～1mmの砂粒を含む	
9	C調査区 1-2遺構面SK3	繩文土器 深鉢	口縁部 ～胴部		①②にぶい黄褐色 (10YR6/4)	0.1～3mmの砂粒を含む	
10	C調査区 1-2遺構面SK3	土師器 壺	底部	②(7.0)	①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)	0.1～3mmの砂粒を含む	
11	C調査区 第2遺構面P912	繩文土器 深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②にぶい黄褐色(10Y6/4)	0.1～3mmの砂粒を含む	
12	C調査区 第2遺構面P912	土鍤	胴部	残存長6.9 最大幅1.5	①②にぶい橙色(7.5YR6/4)	0.1～5mmの砂粒を含む 重量18.4g	
13	C調査区 第2遺構面SK3	韓式系軟質土器 甕もしくは鉢	胴部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②黒褐色(2.5Y3/1)	0.1～1mmの砂粒を含む	
14	D調査区 第1遺構面SD1	磁器 瓶	口縁部		釉 灰褐色(7.5Y7/1) 素地 灰白色(7.5Y8/1)	精良	

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③高さ	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
15	D調査区 第1遺構面SN2	土師器 盆	底部	②(2.8)	①明赤褐色(5YR5/6) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)		精良	
16	D調査区 第1遺構面SN2	須恵器 壺	口縁部		①②灰褐色(N5/0)		精良	
17	D調査区 第3-2層	韓式系軟質土器 もじくは鉢	胴部		①②にぶい黄褐色(10YR6/4)	0.1~2mmの砂粒を含む		
18	D調査区 第3 遺構面検出時	圓形土器	基部		①橙色(7.5YR7/6) ②明黄褐色(10YR7/6)	0.1~3mmの砂粒を含む		
19	D調査区 第3遺構面SN1	繩文土器 浅鉢	口縁部		①②灰オーブ色(5Y6/2)	0.1~3mmの砂粒を含む		
20	D調査区 第3遺構面SN1	土師器 掛口部			①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②暗灰褐色(2.5Y5/2)	0.1~5mmの砂粒を含む		
21	D調査区 第3遺構面SK1	須恵器 坏身	口縁部~底部	①(13.7)	①②灰褐色(5Y6/1)		精良	
22	D調査区 第3遺構面SK2	圓形土器	底部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②橙色(7.5YR6/6)	0.1~3mmの砂粒を含む	把手の 剥離痕あり	
23	F調査区 第1遺構面Pt1	磁器 瓶	口縁部		釉 灰白色(10Y8/1) 素地 灰白色(5Y8/1)		精良	
24	F調査区 第2遺構面Pt1	土師器 壺	口縁部~胴部		①オーブ黄色(5Y6/3) ②にぶい褐色(5YR6/4)	0.1~5mmの砂粒を含む		
25	F調査区 第2遺構面Pt1	土師器 掛口部	底部		①にぶい黄褐色(10YR6/4) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)	0.1~4mmの砂粒を含む		
26	F調査区 第3遺構面SK5	繩文土器 深鉢	底部		①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.1~2mmの砂粒を含む		
27	F調査区 第3遺構面SK6	須恵器 壺	胴部		①灰オーブ色(5Y6/2) ②灰白色(5Y7/2)	0.1~4mmの砂粒を含む	焼成不良	
28	F調査区 第3遺構面SK6	須恵器 坏蓋	天井部~胴部		①②灰褐色(N4/0)	0.1~1mmの砂粒を多く含む		
29	G調査区 第1遺構面Pt7	土師質土器 壺	胴部~底部	②(13.6)	①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1~5mmの砂粒を含む		
30	G調査区 第1遺構面Pt7	瓦質土器 鍋かき	口縁部~胴部	①(27.2)	①黒褐色(2.5Y3/1) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1~3mmの砂粒を含む	外面にスス付着	
31	G調査区 第3 遺構面検出時	土師器 圓形土器	基部		①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②にぶい橙色(5YR6/4)	0.1~0.5mmの砂粒を含む		
32	G調査区 第5-4・7層	須恵器 壺	胴部		①②灰褐色(N6/0)	0.1~1mmの砂粒を含む		

表20 出土遺物(石器・石製品)観察表

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
33	C調査区 第1-1遺構面SK5	硯	全長10.2 最大幅7.7 最大厚1.9	215.33	赤色 頁岩	赤間硯(銘 赤間間)
34	G調査区 第5-7層	石斧	全長9.7 最大幅4.4 最大厚3.0	191.3	安山岩 か	基部を欠損

e.G調査区出土遺物

29・30は第2遺構面Pit7出土。29は土師質土器(佐野焼)甕の胴部へ底部。内面にヨコナデ、外面に指頭痕が残る。30は近世の瓦質土器。鍋か。口縁部をL字状に折り曲げる。外面全体にススが厚く付着する。31は第3遺構面検出時出土土器。土師器竈形土器の基部。外面にタテハケ、内面には同心円状當て具痕が残る。32は第5・4・7層出土。須恵器甕胴部。外面に平行タキ・カキメを施し、内面には同心円状當て具痕が残る。

f.C・G調査区出土石器・石製品

33はC調査区第1-1遺構面SK5出土。赤色頁岩製赤間硯。硯面には墨痕が顕著に残り、「赤間闇」の銘を持つ。銘の特徴から、19世紀前半から後半に位置づけられる。34は磨製石斧。やや湾曲する素材を使用し、基部は欠損する。縄文時代と考えられる。

【註】

- 1)以下で報告する韓式系軟質土器の甕もしくは鉢とした胴部片は鍋・瓶の一部である可能性もあるが、記載は省略する。
- 2)岩崎仁志(2005)「近世赤間硯の銘について」山口考古学会(編)『山口考古』第25号、山口

(7) 本発掘調査小結

今回の本発掘調査の結果、A～G調査区では平成15年度調査区と近似する層序と第1～3遺構面を確認した。第1遺構面は近世～近代の遺構面と考えられる。ほとんどの遺構からは時期を示す遺物が出土しなかつたが、G調査区第1遺構面Pit7では、近世の土師質土器と瓦質土器が出土し、第1遺構面が近世の遺構面であったことを示す貴重な成果が得られた。また、古墳時代と推測される第2～3遺構面については、深さ20cmに満たず、土師器、須恵器の小片を伴うピット、土壤が主体であった。遺構面形成層の多くが遺物包含層であることから、時期幅のある土器が出土した遺構もみられ、詳細な時期を断定できる遺構はほとんどない。しかし、F調査区では第2遺構面Pit1から古墳時代後期と推測される竈形土器、甕がまとめて出土した。関連して、遺構に伴うのかは断定できないが、韓式系軟質土器、陶質土器の出土も注目される。また、G調査区では深さ50cm以上の土壤が検出された。近似する土壤は平成2年度調査区でも検出されている。これらの土壤は掘立柱建物の一部の可能性があり、今後の面的な調査が待たれる。

一方、H調査区は他調査区と層序が大きく異なっていた。遺構面を1面確認し、土壤・ピットが各1基検出されたが、時期は不明である。第4～6層は遺物包含層であるが、摩滅した土器片が多いことから、附属中学校体育館敷地で検出された遺物包含層とは異なる可能性が高い。以上、今回の調査で検出した遺構の時期や機能については不明な点が多く、今後も丹念な調査を積み重ねていく必要がある。

【註】

- 1)横山成己(2005)「第1章第6節、教育部附属光小学校エレベーター昇降路他新設に伴う試掘・立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口
- 2)河村吉行(1992)「第3章 光構内教育部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、山口
- 3)福本幸夫(1966)「光市における先原史時代の遺跡」、福本幸夫(編)『先原史時代の光市』、光(山口)
- 4)横山成己(2005)「付篇 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』、山口

(8) 立会調査の方法と経緯

排水管新設工事は本管に近い正門側から小・中学校校舎側、すなわち北西から南東方向へ進行する工程が組まれ、上流側の排水橋を掘削後、その間のルートを下流側から掘削する手順で計画された。しかし、工事の開始が遅れたため、最大4箇所同時に掘削することになった。掘削にあたっては、地盤が砂地である関係上、附属中学校校舎南側の一部を除く区域で矢板施工による掘削が行われた。矢板施工による掘削は現地表下1m程度まで素掘りで、その後は矢板を打ちながら行った。

上記の工事に対して、9月26日までは田畠・松浦が、以後は田畠が調査を担当した。両名の土層記載方法は異なるが、複数箇所で同時に掘削が行われていた関係上、両名で層序の確認を行うことができなかつたため、以下では両名が記録した層名で報告する。層名の詳細は記載を省略したが、「粗砂」「粗粒砂」とした層は0.5~3cm大の礫を含んでいた。層序・遺構の確認と記録は施工業者の全面的な協力を得て、矢板を打つ前に重点的に行った。矢板施工後は崩落と安全確保の問題から層序の確認が困難であった。このため、矢板施工後の層序の記録作業は一部の地点にとどめ、記録した地点においてもおおよその標高を記録するにとどまった。また、以下で報告する各地点で検出された遺構・包含層については、調査担当者が短時間に複数箇所を調査する必要があったほか、随所にみられた擾乱により、地点間の連続性についてはすべての関連箇所で確認できなかつた。

報告にあたっては、工事範囲が構内の広範囲に及ぶため、便宜上北西部(23地点より北西)、南東部(23地点より南東)に分けて行う。層序の記載は、近似した層序がみられる複数地点については代表的な箇所、これまで近隣で調査が実施されていない場所に限定した。また、土色の詳細は柱状図に記載のあるものについては省略し、主要な遺構の埋土は冒頭にアルファベットを付して柱状図に記載した。出土遺物について記載のない遺構は遺物が出土していないことを示す。

(9) 立会調査における層序と遺構(図98~103・写真167~224)

a. 北西部

No.0の矢板施工前の層序は、①表土・造成土(層厚45cm)、②黒褐色粗砂(層厚10cm)、③にぶい黄色粗砂(層厚15cm)、④黒褐色粗砂(層厚5cm)、⑤にぶい黄色粗砂(層厚25cm以上)である。以下では、黄褐色系の粗砂の堆積を確認したが、壁面崩落のため、詳細は不明である。崩落した土層の下位掘削土と推測される排土から縄文土器片(図104-1)が出土した。掘削底面付近では層厚30cm以上の⑥灰白色粗砂を確認した。

1地点南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚60cm)、②浅黄色粗砂(層厚10cm)、③浅黄色粗砂(疊多層厚127cm)、④にぶい黄褐色粗砂(層厚約70cm)、⑤にぶい黄色粗砂(層厚約42cm)、⑥灰白色粗砂(層厚6cm以上)である。南西壁断面の②層上面で径80cm、深さ27cmのピットを検出した。

2地点東壁の層序は、①表土・造成土(層厚35cm)、②明黄褐色細砂(層厚20cm)、③明黄褐色礫(層厚80cm以上)である。2~3地点の②層からは土師器、韓式系軟質土器、須恵器片が出土した。また、③層上面でピットを2基検出した。Pit1は径33cm、深さ39cm、Pit2は長径20cm、短径18cm以上、深さ5cmである。また北東部では、③層上面で落ち込みを検出した。埋土はオーリーブ褐色(2.5Y4/3)粗砂で、深さは37cmである。土師器、韓式系軟質土器、須恵器片が出土した。

3地点北壁の層序は①表土・造成土(層厚60cm)、②明黄褐色細砂(層厚28cm)、③灰色粗砂(層厚20cm以上)。③層は2地点から統く落ち込みの埋土と考えられる。土師器、陶質土器片(排土)が出土し

た。

4地点では土層の詳細は確認できなかつたが、現地表下85cm、褐色(10YR4/6)中礫混粗粒砂上面で径43cm、深さ15cmのビットを検出した。埋土からは土師器壺の底部片(図104-12)が出土した。

5地点では標高2.3m付近で深さ約20cmの落ち込みを検出した。この落ち込みの埋土からは縄文土器、土師器片が出土した。

No.2北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚58cm)、②明黄褐色細砂(層厚25cm)、③オリーブ褐色粗砂(層厚25cm)、④淡黄色粗砂(層厚25cm以上)である。③層は4地点から続く落ち込みの埋土で、北西壁(幅約2m)の範囲では、南西から北東にかけて緩やかに傾斜して堆積しており、6地点まで続いていた。③層からは縄文土器、土師器片が出土し、土師器には完形近く復元できる甕(図104-14)も含まれていた。また、③層上面で直径45cm、深さ約20cmのビットを検出し、土師器片が出土した。

7地点では、幅約11mの範囲で遺物包含層が検出された。約7-1地点(No.2より4m南東)北西壁の層序は①表土・造成土(層厚72cm)、②明黄褐色細砂(層厚20cm)、③黒褐色粗砂(層厚30cm以上)である。③層は遺物包含層である。落ち込みの埋土である可能性もあるが、始点を確認できなかつたため、遺物包含層として扱う。同層からは土師器、韓式系軟質土器、韓式系瓦質土器、陶質土器、須恵器片が出土した。遺物はNo.2より南東4m付近で出土のものを北西部1、No.2より南東4~7.5m出土のものを北西部2、No.2より南東7.5~11mで出土のものを南東部として報告する。

また、7-2地点(No.2より4.5m南東)では、現地表下61cm、標高2.69mの浅黄色細砂上面で埋甕を検出し、佐野焼甕の胴部~底部が出土した。上半部が失われていることから、近世構面が大幅に削平されていることが判明した。

8地点では、幅約5mに渡って、煉瓦による基礎が検出された。昭和前半以前の前身施設の建物跡と考えられる。

9地点では、幅約5mに渡って遺物包含層が検出された。No.2より21m南東における南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚70cm)、②浅黄色細砂(層厚30cm)、③黄灰色細砂・黒褐色粗砂(層厚20cm以上)である。③層は遺物包含層である。No.2より22m南東では層厚約30cmで、縄文土器、土師器、韓式系瓦質土器、須恵器片が出土した。

10地点は、②層までは9地点と層序が近似する。標高2.2mで、層厚8cm以上の遺物包含層である③灰オリーブ色粗砂を検出した。②・③層からは土師器、六連式製塙土器片が出土した。また同層上面で長径50cm、短径38cm、深さ18cmのビットを検出した。このビットからは、弥生土器片が出土した。

11地点北西壁の層序は、①-1・2表土・造成土(層厚約38cm)、②褐色細粒砂(層厚約19cm)、③にぶい黄褐色中~極粗粒砂(層厚約27cm)、④にぶい黄褐色粗粒砂(層厚8cm以上)である。北西壁では、③層上面でビット1基、④層上面でビット1基を検出した。また、床面では④層上面で直径30cmのビットを2基検出した。ビットの深さは各々9・19cmである。これらのビットからは土師器片が出土した。また、12地点北東壁でも④層上面でビットを2基検出した。

No.2-1地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚160cm)、②淡黄色系粗砂(層厚156cm以上)である。崩落と掘削底面付近の湧水が激しかつたため、造成土以下の層序を明確に確認できなかつた。なお、これより北東側の管路でも現地表下1m前後の掘削が行われたが、造成土の範囲内であった。

13地点南東壁の層序は①表土・造成土(層厚78cm)、②浅黄色細砂(層厚25cm)、③暗灰黄色粗砂(層厚15cm)、④灰黄色粗砂(層厚20cm)である。南東側では②層の下に⑤褐色粗砂(層厚20cm)が見られた。③層は落ち込みの埋土とみられ、少なくとも幅が4mあり、埋土からは土師器片が出土した。②層

上面では直径80cm、深さ25cmのビットを検出した。遺物はないが、近世の遺構と考えられる。また、床面の⑤層上面で長径45cm、短径40cm、深さ20cm以上のビットを検出した。埋土からは土師器、六連式製塙土器片が出土した。

14地点では、②層までは13地点と同じ層序で、標高2.3m付近で暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂を検出した。同層は幅約3.5mあり、落ち込みの埋土と考えられる。埋土から土師器、須恵器片が出土した。また、同層上面で直径25cm、深さ12cmのビットを検出した。

15地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚17cm)、②浅黄褐色極細粒～極粗粒砂(層厚50～60cm)、③褐色極粗粒～細粒砂(層厚16～20cm)、④にぶい黄褐色細粒～中粒砂(層厚48～59cm)で、その下位にはさらに⑤～⑦層が堆積する。②層は13・14地点の②層と同一層と考えられる。14～15地点の②層からは韓式系軟質土器片が出土した。また、15地点③層からは土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器片が出土したことから近世の遺物包含層と考えられる。このほか、④層上位からは土師器、須恵器、韓式系軟質土器、土師質土器片が出土した。

16地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚31cm)、②明黄褐色極細粒～極粗粒砂(層厚41cm)、③にぶい黄褐色細～中疊(層厚29cm)、④明黄褐色極粗粒砂～細疊(層厚16cm)、⑤褐色細～極粗粒砂(層厚8cm)、⑥暗灰黄色極粗粒砂混じり中粒砂(層厚20cm)、⑦にぶい黄橙色中～極粗粒砂(層厚23cm)、⑧灰黃褐色粗～中粒砂(層厚19cm)、⑨暗灰黄色中疊～細疊(層厚8cm)、⑩明黄褐色細粒～極粗粒砂(層厚20cm以上)である。④～⑤層上面から、繩文土器、土師器、韓式系軟質土器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器片が出土した。⑤層は本発掘調査で確認された第1遺構面形成層に対応すると考えられる。

17地点の層序は、①表土・造成土(層厚29cm)、②灰白色(10YR8/2)粗砂、③褐色(10YR3/3)粗砂である。③層上面の標高は2.71mで、同層からは近世磁器碗底部片が出土した。

18地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚25cm)、②灰白色粗砂(層厚60cm)③暗灰黄色粗砂(層厚40cm)、④黒色粗砂(層厚20cm以上)である。④層は幅約3mに渡り分布するが、明確に落ち込む箇所は確認していない。④層からは弥生土器、土師器、韓式系軟質土器片が出土した。

19地点では現地表下約30cm(造成土直下)、標高2.98m付近で幅2mに渡って、近代とみられる石積を確認し、20地点でも幅約3mに渡って、同様の石積を確認した。

No.5では、現地表下29cm(造成土直下)、標高2.96mの浅黄色(5Y7/3)粗砂上面で、幅95cm、深さ47cmの石敷暗渠を検出した。

21地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚19cm)、②褐色極細粒～極粗粒砂(層厚35cm)、③褐色～にぶい黄褐色細粒～極粗粒砂(層厚21cm)、④にぶい黄褐色細粒～粗粒砂(層厚80cm)、⑤暗褐色・にぶい黄褐色極粗粒砂～細疊(層厚33cm)、⑥にぶい黄橙色極粗粒砂～細疊である。②層上面では幅約3mに渡って近代とみられる石垣を確認した。22地点では、21地点の③層と思われる土層から業者により弥生土器片が採集された(図106～60)。

23地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚90cm)、②明黄褐色中粒～極粗粒砂(層厚63cm)、③黒褐色中粒～極粗粒砂(層厚8cm)、④黒褐色～暗褐色中粒～極粗粒砂(層厚26cm)、⑤黒褐色～暗褐色中粒～極粗粒砂(④層より疊を多く含む 層厚3cm以上)である。重機掘削の際、③～⑤層で土師器片が出土したが、上層からの混入である可能性がある。

24地点では、現地表下51cmのにぶい黄橙色細～粗粒砂上面で、北西～南東方向の石敷暗渠が検出された。

b.南東部

25地点では、現地表下約42cmの淡黄色(2.5Y8/4)粗砂上面で、直径35cm、深さ18cmのピットを検出した。ただし、埋土に淡黄色粗砂直上の灰黄褐色粗砂(瓦片等あり)を含むことから、近世～近代の遺構と考えられる。

26地点では、現地表下40cm、標高2.83mの淡黄色(2.5Y8/4)粗砂上面で直径18cm、深さ10cmのピットを2基検出した。平成15年度調査区の第2遺構面との対応が考えられる。

No.6北東・北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚約100cm)、②にぶい黄褐色極粒細砂(層厚約5cm)、③浅黄橙色中粒～極粒細砂(層厚約20cm)、④灰黄褐色極粒細砂(層厚25cm程度か一部崩落)、⑤暗褐色極粗粒砂～中礫(層厚約35cm)、⑥黄褐色細～中礫と褐色中粒砂～細礫の互層(層厚約40cm)、⑦黒褐色粗粒砂・中礫(水分多い)である。③層壁面から土師器片、⑤層掘削時に土師器片が出土した。

27地点(No.6より7.5m南西)では、矢板前底面の現地表下82cm、標高2.38mまでは造成土であった。また、矢板施工後は②淡黄色粗砂、③黄灰色粗砂の堆積を確認した。さらに掘削を進めた結果、標高1.96mで④黒褐色粗砂(水分多い 層厚53cm)を検出した。底面は⑤灰色粗砂であった。

④層はNo.6南西3.3～12m付近に分布する遺物包含層である。北東側ではさらに下降しているようであり、No.6の③～⑤層に統く可能性がある。過去に附属中学校体育館周辺で検出されている遺物包含層と一連である可能性が高い。④層の機械掘削は慎重に行い、排土は別置して遺物の回収に努めた。時間的制約から厳密な分層発掘ができなかつたため、遺物は、北東部(No.6から南西3.3～7m)、南東部(No.6から南西7～12m)別に④・⑤層として取り上げ、土師器、韓式系軟質土器、陶質土器、須恵器片が出土した。ただし、排土出土を含めたほとんどの土器に④層が付着していたため、基本的には④層出土と判断できる。

28地点では、附属学校前身施設のものと考えられるコンクリート基礎を幅6.5mに渡って検出した。

29地点では、現地表下55cm、標高2.68mの明黄褐色(2.5Y7/6)上面で径37cm、深さ15cmのピットを検出した。本発掘調査A調査区第2遺構面に対応すると考えられる。

30地点では、現地表下64cm、標高2.37mのにぶい黄褐色(10YR5/4)粗砂上面で径25cm、深さ22cmのピットを検出した。本発掘調査A調査区第3遺構面に対応すると考えられる。

31地点では、現地表下37cmのB調査区第3～8層と同一と思われる黄褐色粗砂上面で近世～近代と考えられる径18cm、深さ39cmのピットを検出した。

No.6～2南東壁の層序は、①表土・造成土(層厚28cm)、②にぶい黄褐色(10YR3/4)粗砂(層厚35cm)、③褐灰色(10YR4/1)・黒褐色(10YR3/1)粗砂(層厚10～20cm)、④明黄褐色(10YR7/6)粗砂(層厚35cm)、⑤灰黄褐色(10YR5/2)粗砂(層厚30cm以上)であった。③層は標高約2.6mで検出した。本発掘調査D調査区第3遺構面SX1の延長部分の可能性がある。また、④層はD調査区第3遺構面に対応すると考えられる。同層上面で径18cm、深さ12cmのピットを検出した。

No.6～3南東壁の層序は、①表土・造成土(層厚52cm)、②にぶい黄褐色細砂(層厚24cm)、③灰黄褐色粗砂(層厚18cm)、④にぶい黄褐色細砂(層厚23cm)、⑤明黄褐色礫(層厚9cm)、⑥灰白色粗砂(層厚55cm以上)である。③層上面で幅100cm、深さ64cmの土壌を検出した。また、この土壌は⑤層上面から掘り込まれた土壌を切っていた。

32地点の層序はNo.6～3～1と近似する。現地表下80cm、標高2.72mのNo.6～3～1の④層上面で幅60cm、深さ10cmの不明遺構を検出した。

No.6-3-1南東壁の層序は、①表土・造成土(層厚52cm)、②淡黄色粗砂(層厚9cm)、③にぶい黄褐色粗砂(層厚8cm)、④黄褐色粗砂(層厚24cm)、⑤にぶい黄褐色粗砂(層厚23cm)、⑥明黄褐色粗砂(層厚10cm以上)である。④層上面で深さ24cmの溝もしくは落ち込みと考えられる遺構を検出した。⑤層上面では、北東壁で径50cm、深さ30cmの遺構断面を検出し、⑥層上面では、径22cm、深さ14cmのピットを検出した。

33地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚41cm)、②褐色粗砂(層厚25cm)、③浅黄色粗砂(層厚20cm)、④淡黄色粗砂(層厚18cm)、⑤灰白色粗砂(層厚34cm以上)である。③層上面で径30cm、深さ15cmのピットと深さ16の溝もしくは落ち込みと考えられる遺構を検出した。

34地点の層序は①表土・造成土(層厚45cm)、②褐色(10YR4/4)粗砂で、以下は35地点と層序が近似する。標高2.86mの35地点②層上面で、径34cm、深さ20cmのピットを検出した。

35地点北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚50cm)、②淡黄色細砂(層厚42cm)、③浅黄色粗砂(層厚15cm)、④灰白色粗砂(層厚33cm以上)である。②層上面で幅約150cm、深さ90cmの土壌もしくは溝と考えられる遺構を検出した。

36地点の層序は35地点と近似する。現地表下60cmの35地点②層上面で幅98cm、深さ40cmの土壌と、幅72cm、深さ52cmの土壌を検出した。

No.6-4-5の層序も35地点と近似するが、③層上面が35地点より約15cm、④層上面が35地点より約20cm低い。②層を検出面として、南東壁では幅104cm、深さ77cmの土壌、北西壁では、幅77cm、深さ60cmの土壌を検出した。

No.6-5の層序は、①表土・造成土(層厚63cm)、②浅黄色(5Y7/3)細砂(層厚80cm)、③灰白色(2.5Y7/1)細砂(層厚16cm以上)である。掘削底面の標高は1.98mである。

37地点では、現地表下約40cmの灰白色粗砂上面で石敷き暗渠を3箇所で検出した。灰白色粗砂上面には褐色粗砂が20cm程度みられるが、これらの暗渠は近代の整地に伴うものである可能性がある。この地点よりNo.7間は掘削時の壁面崩落が著しく、層序を明確に確認できなかった。

No.7では現地表下約2m、標高1.7mまで掘削を行った。底面近くの一部で灰白色(2.5Y8/1)粗砂を確認したが、大半は造成土の範囲内であった。

No.8南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚30cm)、②暗褐色極細～中粒砂(層厚25cm)、③浅黄色細～極粗粒砂(層厚30cm)、④暗褐色細～粗粒砂(層厚55cm)、⑤暗褐色細～中粒砂(層厚20～56cm)、⑥黒色細～中粒砂(層厚5～36cm以上)である。④層からは近世～近代とみられる櫛鉢片が出土した。⑥層は南東側にかけて落ち込んでおり、過去の調査で確認されている遺物包含層である。No.8～N o.8-1間で弥生土器、土師器、韓式系軟質土器、須恵器片が出土した。また、機械掘削による同層堆土は別置して、遺物を回収したところ、ほとんどの遺物は⑥層が付着していた。

No.8-2北西壁の層序は①表土・造成土(層厚74cm)、②黄褐色細砂(層厚58cm)、③暗灰黄色粗砂(層厚16cm)、④黒色細砂(層厚22cm以上)である。④層はNo.8⑥層と一連の包含層である。④層上面の標高は1.97mで、No.8⑥層上面より17cm高い。なお、④層とNo.8⑥層の関連を確認できなかつたため、No.8-1～2間の遺物は④層として取り上げた。

38地点の層序は、①表土・造成土(層厚95cm)、②暗褐色粗粒砂混じり中粒砂(層厚20cm)、③黒褐色細～中粒砂(層厚11cm)、④にぶい黄褐色粗粒砂～中粒砂(層厚25cm)、⑤④と同色か(崩落)極粗粒砂～細歴(層厚10cm以上)である。③層から遺物は出土しなかつたが、No.8⑥層、No.8-2の④層と一連の層と考えられる。38地点より約2m北東では③層上面が約20cm低く、御手洗湾に向けて傾斜して

いる状況が確認できた。

39地点南西壁の層序は、現地表下113cmまでが①表土・造成土で、以下113~143cmで②灰色(7.5Y4/1)粗砂・床面で③オリーブ黒色(5Y3/1)粗砂を検出した。②・③層は遺物包含層で、No.9-1より南東3m付近から分布する。

40地点南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚33cm)、②にぶい黄褐色粗砂(層厚50cm)、③灰色粗砂(層厚18cm)、にぶい黄褐色粗砂(層厚25cm以上)である。③・④層は41地点でも確認しており、41地点③層からは土器片が出土した。また、40地点②層上面で石敷暗渠、④層上面で、幅65cm、深さ34cmの土壌を検出した。

No.9-3南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚78cm)、②黄褐色(2.5Y5/4)疊、③黄褐色(2.5Y5/4)粗砂である。標高2.57mの②層上面から40地点③層と同一の灰色粗砂が北西方向に24cm落ち込んでいる状況が確認できた。なお、No.9-3より北西における管路の掘削底面はNo.9-2付近まで灰色粗砂であった。

No.9Bの層序は、①表土・造成土(層厚72cm)、②灰オリーブ色(5Y6/2)細砂、③にぶい黄褐色(10YR6/4)粗砂(層厚70cm)、④灰白色(2.5Y7/1)粗砂(層厚20cm以上)である。②層上面で径25cm、深さ10cmのビットを検出した。近世~近代の遺構と考えられる。また、標高2.175mの③層上面で長径40cm、短径30cm、深さ16cmのビットを検出した。

42地点の層序は、①表土・造成土(層厚55cm)、②にぶい黄色粗砂(層厚37cm)、③黒褐色粗砂(層厚21cm)、④にぶい黄褐色粗砂である。③層は遺物包含層で、土器片が出土した。

No.9C北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚66~70cm)、②にぶい黄色細砂(層厚47cm)、③にぶい黄褐色粗砂と黒褐色粗砂の互層(層厚45~50cm)、④明黄褐色細砂(層厚44cm)、⑤褐色粗砂(層厚20cm)、⑥黄色粗砂(層厚20cm)、⑦淡黄色細砂である。③層上面で径32cm、深さ50cmのビットを検出した。

43地点北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚36cm)、②にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂(層厚42cm)、③浅黄色(2.5Y7/4)細砂(層厚18cm)、④淡黄色(2.5Y8/3)粗砂(層厚36cm以上)である。③層は平成23年度予備発掘B調査区6層と同一層と考えられる。②層上面で石敷暗渠、標高2.66mの③層上面で幅70cm、深さ53cmの土壌を検出した。

No.13の層序は①表土・造成土(層厚44cm)の直下が43地点③層であった。標高2.56mの③層上面で、幅120cm、深さ90cmの土壌を検出した。

44地点の層序はNo.13と近似する。標高3.0mの③層上面で径27cm、深さ17cmのビットと、幅35cm、深さ42cmのビットを検出した。

45地点の層序はNo.13・44地点と近似する。②層は43地点③層と同一層と考えられる。標高3.03mの②層上面で幅48cm以上、深さ21cmの遺構を検出した。また、やや削平を受けるが標高2.67mの②層上面でも、幅114cm、深さ40cmの土壌を検出し、土器片が1点出土した。

No.14南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚48cm)、②暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂(層厚19cm)、③浅黄色(2.5Y7/4)細砂(層厚55~67cm)、④灰白色(2.5Y8/1)粗砂である。③層は43地点③層と同一であるが、南東部では黄褐色(2.5Y5/3)粗砂となる。南西壁北西側では標高2.97mの③層上面に層厚約20cm黒褐色(2.5Y3/1)細砂があり、幅約100cm、深さ67cmに渡って落ち込んでいた。掘方は確認できなかつたが、遺構の一部と考えられる。また、南西壁南東側では、標高3.0mの③層上面で幅53cm以上、深さ54cmの遺構断面を確認した。

46地点南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚46cm)、②黒褐色細砂(③を斑状に含む 層厚約13cm)、③黄褐色粗砂(淡黄色粗砂を斑状に含む 層厚26cm以上)である。②層はNo.14②層と同一層と考えられる。②層上面で幅103cm、深さ39cmの土壤を検出した。ただし、土壤の埋土は②層と近似しているため、掘方は不明確であった。

47地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚31cm)、②にぶい褐色粗砂(層厚11cm)、③黒褐色細砂(層厚35cm)、④にぶい黄褐色細砂(層厚48cm以上)で、48地点と近似する。③層は幅170cm、深さ48cmに渡って落ち込んでいた。掘方は確認できなかったが、遺構と考えられる。

48地点北東壁の層序は、①表土・造成土(層厚16cm)、②にぶい褐色粗砂(層厚22cm)、③黒褐色細砂(層厚21cm)、④にぶい黄褐色細砂(層厚54cm以上)である。標高3.37mの②層上面で直径62cm、深さ85cmの土壤(埋甕)を検出した。埋土中心部に佐野焼甕があり、内部は灰黄褐色粗砂と織であった。また、甕の周囲の埋土は橙色粘土であった。全体を掘削していないこともあり、出土した甕を復元するには至らなかったが、埋設された甕は、口縁部形態から19世紀～20世紀に位置づけられる(図110～147)。この遺構により②層が近世～近代の遺構面であることが判明した。

49地点の層序は48地点と近似する。①表土・造成土(層厚32cm)の直下が48地点③層(層厚23cm)であり、幅90cm、深さ24cmに渡って落ち込んでいた。掘方は確認できなかったが、遺構と考えられる。

No.16南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚42cm)、②にぶい黄褐色細砂(層厚106cm)、③灰白色粗砂である。②層は48地点④層と同一層である。北西側の一部は擾乱を受けるが、標高3.09mで幅95cm、深さ106cmの土壤を検出した。

50地点はNo.16と層序が近似する。標高2.61mのNo.16②層上面で幅68cm、深さ40cmの土壤と幅110cm、深さ62cmの土壤を検出した。

No.17南西壁の層序は、①表土・造成土(層厚59cm)、②にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂(層厚15cm)、③にぶい黄褐色(2.5Y6/4)細砂(層厚59cm)、④灰白色(2.5Y8/2)細砂である。③層は16地点②層と同一層である。

No.5-7北西壁の層序は、①表土・造成土(層厚58～86cm)、②黒褐色細砂(層厚2～15cm)、③灰白色粗砂(層厚10～14cm)、④灰黄褐色細砂(層厚2～20cm)、⑤にぶい黄橙色粗砂(層厚80cm以上)である。②層は遺構埋土の可能性もある。なお、No.5-7より北東、No.5-6-3に至る管路の大半は南東側に位置する共同溝埋土と重複していた。また、附属小学校体育館前からNo.5-6に至る管路は擾乱が著しい状況であった。

【註】

1) 福本幸夫(1966)「Ⅱ 光市における先原史時代の遺跡」,福本幸夫(編)『先原史時代の光市』,光(山口)

横山成己(2005)「付篇 光市文化センター所蔵の御手洗遺跡出土遺物」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』,山口

2) 前掲註1)

3) 田畑直彦(2013)「第5節1 教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う予備発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』,山口

光場内(御平山道路・月待山道路)の調査

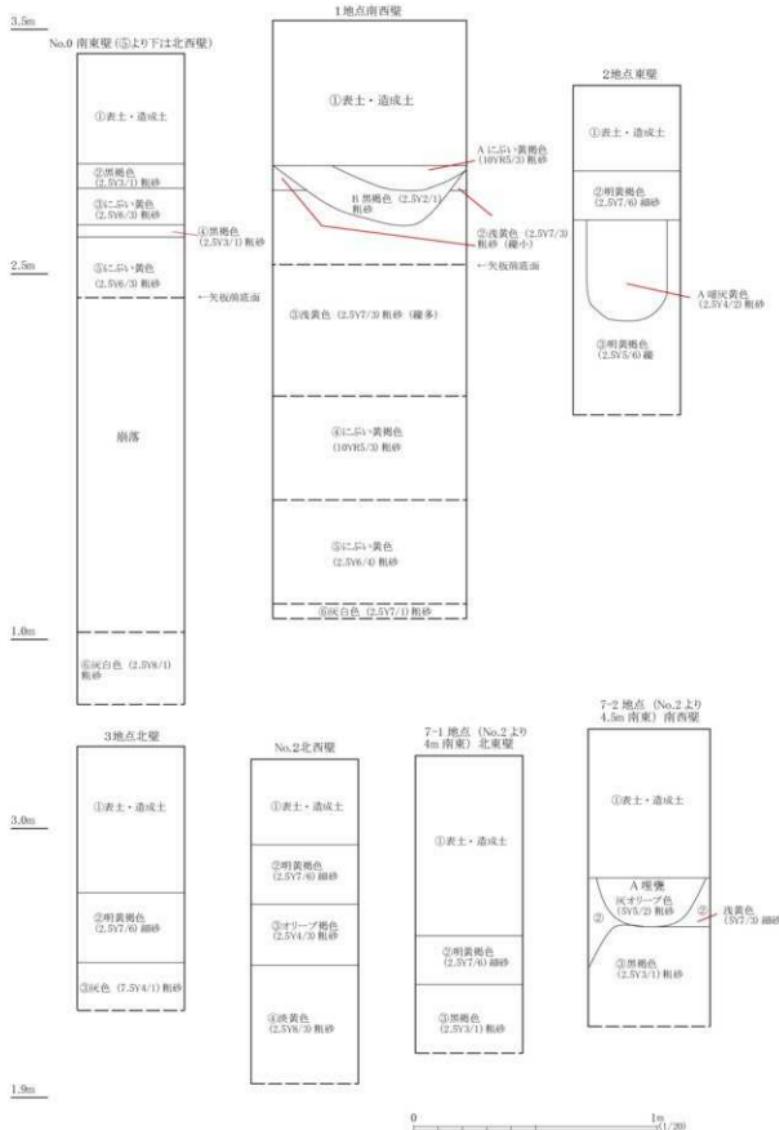
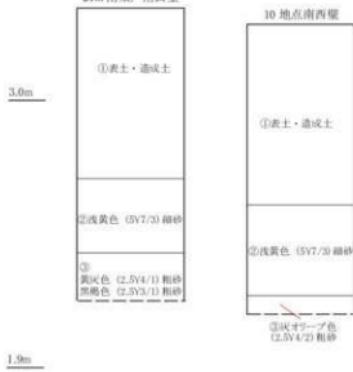


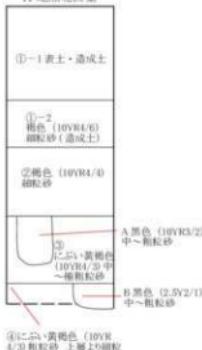
図 98 土層断面柱状図①

光場内(新千歳道路・月待山遺跡)の調査

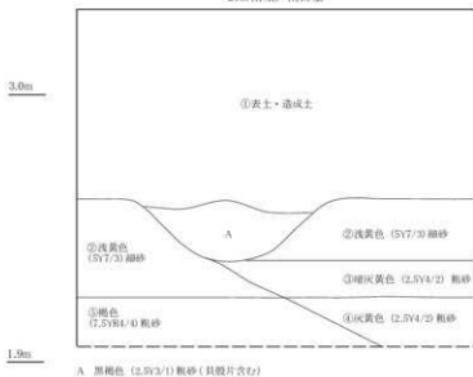
9 地点 (No.2 上り
21m 東側) 南西壁



11 地点北西壁



13 地点 (No.2 上り
20m 東側) 南西壁



15 地点北東壁

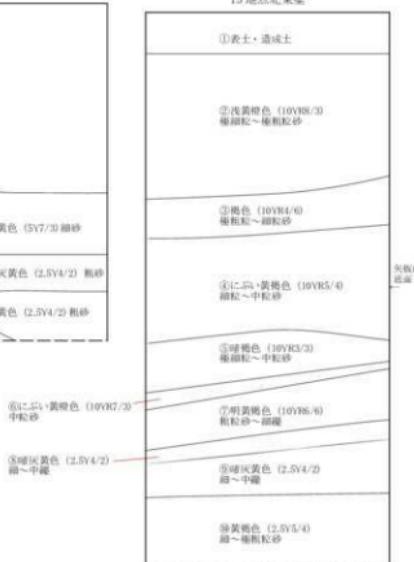


図 99 土層断面柱状図②

光景内(御手洗道路・月持山道路)の調査

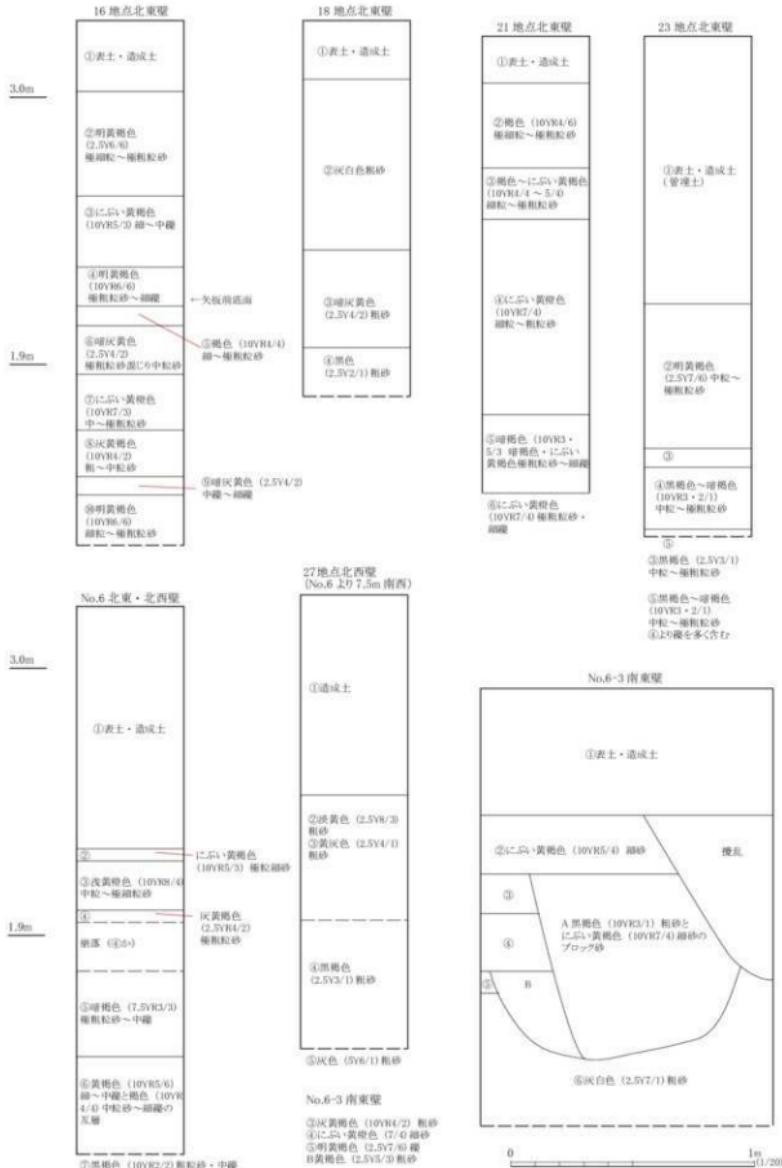


図 100 土層断面柱状図③

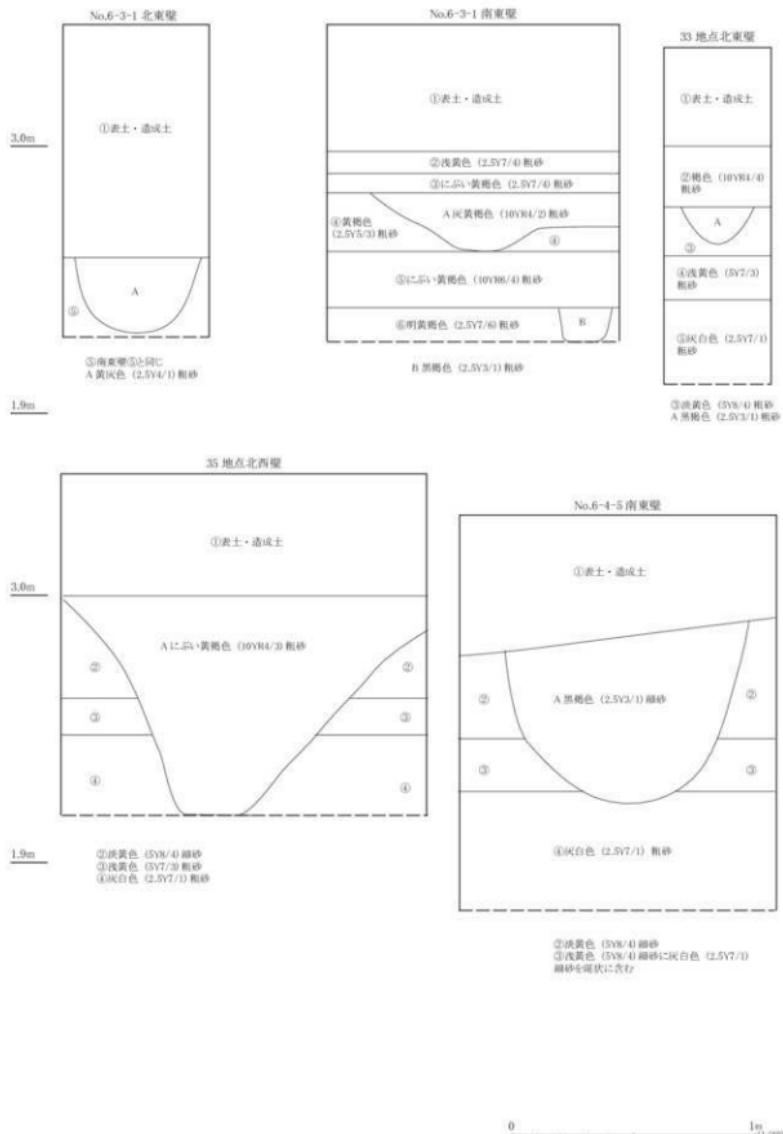


図 101 土層断面柱状図④

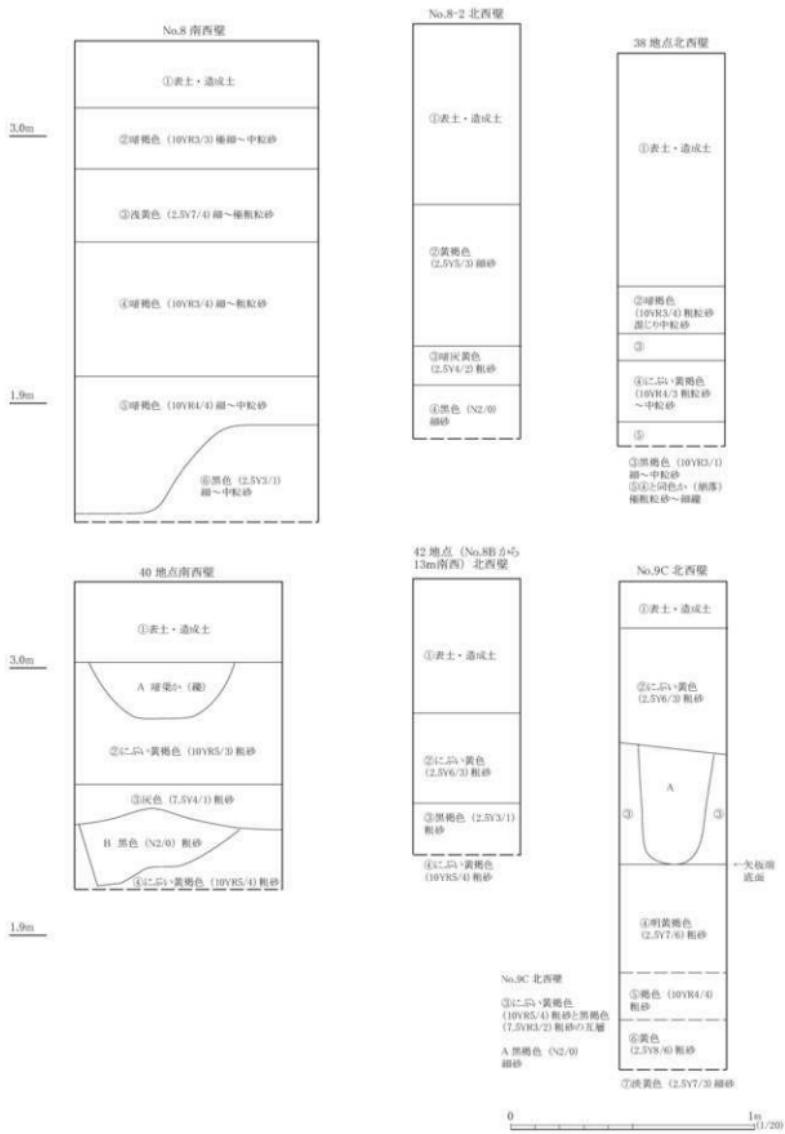


図 102 土層断面柱状図⑤

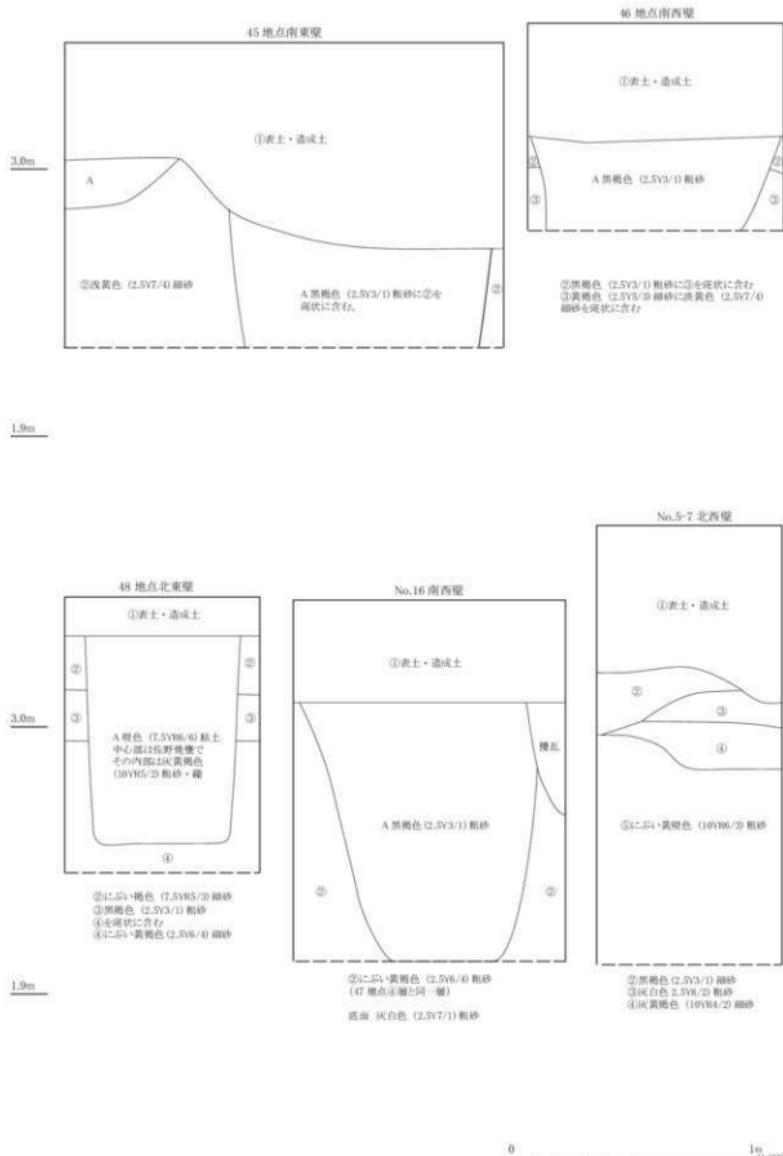


図 103 土層断面柱状図⑥



写真167 No.0南西壁土層断面(北西から)



写真168 No.0北西壁土層断面(南東から)



写真169 1地点南西壁土層断面(北東から)



写真171 2地点ピット・落ち込み検出状況
(南東から)

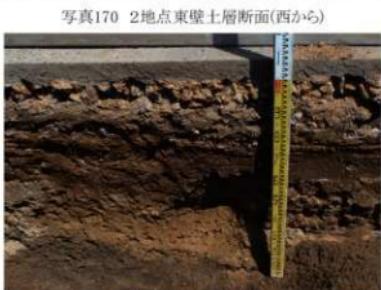


写真172 3地点北壁土層断面(南から)



写真173 4地点ピット検出状況(北西から)



写真174 5地点東壁土層断面(南西から)



写真175 No.2ピット検出状況(南東から)



写真176 No.2北西壁土層断面(南東から)



写真177 7-1地点(No.2より4m南東)
北東壁(南西から)



写真178 7-1地点(No.2より4.5m南東) 南西壁土層断面(北東から)



写真179 9地点南西壁土層断面(北東から)



写真180 10地点ピット検出状況(北東から)



写真181 No.11北西壁土層断面(南東から)



写真182 11地点ピット検出状況(北西から)



写真183 12地点北東壁土層断面(南西から)



写真184 13地点南西壁土層断面(北東から)



写真185 No.14地点ピット検出状況(北東から)



写真186 15地点北東壁・南東壁土層断面(西から)



写真187 16地点北東壁・南東壁土層断面(西から)



写真188 17地点南西壁土層断面(北東から)



写真189 18地点北東壁土層断面(南西から)



写真190 No.5北東壁土層断面(南西から)



写真191 23地点北東壁下部土層断面(南西から)



写真192 26地点南東壁土層断面(北西から)



写真194 27地点北東部調査風景(南西から)



写真193 27地点北東部遺物包含層検出状況(南西から)



写真195 29地点南東壁土層断面(北西から)

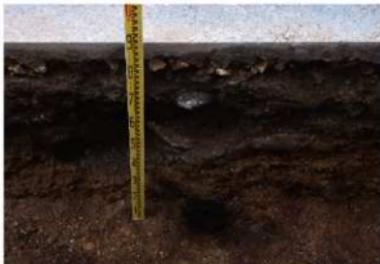


写真196 30地点北西壁土層断面(南東から)



写真197 No.6-2南東壁土層断面(北西から)



写真198 No.6-3南東壁土層断面(北西から)



写真199 No.6-3-1北東壁土層断面(南西から)



写真200 No.6-3-1南東壁土層断面(北西から)



写真201 33地点北東壁土層断面(南から)



写真202 35地点北西壁土層断面(南東から)



写真203 36地点北西壁土層断面(南東から)



写真204 No.6-4-5南東壁土層断面(北西から)



写真205 No.8北西壁土層断面(南から)



写真206 No.8-2北西壁土層断面(南東から)



写真208 38地点南西壁土層断面(北東から)



写真207 37地点北西壁下部土層断面(南東から)



写真209 39地点南西壁土層断面(北東から)



写真210 40地点南西壁土層断面(北東から)



写真211 41地点南西壁土層断面(北東から)



写真212 42地点北西壁土層断面(南東から)



写真213 No.9C北西壁土層断面(南東から)



写真214 43地点北西壁土層断面(南東から)



写真215 No.13北西壁土層断面(南東から)



写真216 44地点南東壁土層断面(北西から)



写真217 45地点南東壁土層断面(北西から)



写真218 No.14南西壁土層断面(北東から)



写真219 46地点南西壁土層断面(北東から)



写真220 47地点北東壁土層断面(南西から)



写真221 48地点北東壁土層断面(南西から)



写真222 No.16南西壁土層断面(東から)



写真223 50地点南西壁土層断面(北東から)



写真224 No.5-7北西壁土層断面(南東から)

(10) 立会調査出土遺物(図104~110・写真225~239)

以下では各地点別に出土した主な遺物を報告する。なお、陶質土器と初期須恵器は、小片の場合両者の識別が困難であるため、検討の余地がある。

a. 北西部

【No.0排土】1は縄文土器の深鉢胴部。内外面に巻貝条痕を施す。後～晚期か。

【No.0～No.1排土】2は縄文時代晩期の深鉢口縁部。緩やかな波状口縁を呈すると考えられる。内外面に二枚貝条痕を施す。3は縄文時代晩期の深鉢底部。摩滅が激しい。底面にミガキを施す。

【2地点SX】4は土師器甕もしくは鉢。5は土師器甕口縁部。外面はヨコナデによる凹みが顕著である。6は須恵器坏底部。底面にナデを施す。

【3地点SX】7は土師器甕口縁部。8はSX排土表採で、陶質土器の壺もしくは甕の胴部。外面に格子目タタキ、内面にナデを施す。

【2～3地点間排土】9は土師器高坏裾部。10は韓式系瓦質土器壺の胴部。外面は縄文タタキ後、4条の沈線を施す。内面は斜方向のミガキを施す。

【2～3地点間排土】11は古式土師器の高坏脚部。脚部内面には右から左方向のケズリを施す。

【4地点ピット】12は小型丸底壺の底部。外面は丹塗りである。

【5地点SX】13は古墳時代中期の土師器甕口縁部。口唇部をヨコナデによりつまみ上げる。接合しない同一個体と思われる胴部片がある。14も古墳時代中期の土師器甕。口縁部外面は頸部のヨコナデにより肥厚させる。胴部外面にはタテハケ、内面はケズリ後ナデを施す。15は土師器甕胴部。外面に平行タタキを施す。内面には外面のタタキと近似した当て具痕があるが、切り合いが著しく単位は不明確である。16は弥生土器もしくは土師器甕の底部である。東海系台付甕の模倣品²¹。内面はナデ、外面にタテハケを施す。17は古式土師器の小型丸底壺(鉢)。二重口縁で胴部内面も屈曲する。胎土は精良。

【No.2SX】18は土師器甕もしくは鉢。口縁部外面に板状工具があたった痕跡がある。

【6地点SX】19は東海系台付甕の底部で、搬入品と考えられる。端部には折り返しがあり、ナデを施す。外面は左上がりのハケで下半はナデ消される。赤塚次郎氏分類のB類もしくはC類で、廻間Ⅱ～Ⅲ式、弥生時代終末期～古墳時代前期に位置づけられる。

【2地点～No.2間排土】20は佐野焼甕の口縁部である。口縁部はやや内傾しており、肥厚させて1条沈線を施す。口縁部の特徴から18世紀頃と推測される。7～2地点で検出されたような埋甕の一部であった可能性が高い。

【7地点北西部1③層】21は土師器坏口縁部。内面にヨコミガキを施す。22は土師器甕口縁部。23は韓式系軟質土器甕の胴部。外面に格子目タタキ、内面にヨコナデを施す。24は韓式系軟質土器鉢の胴部～底部。底部側面にヨコナデを施す。残存部は少ないが、その上部には平行タタキが残る。25は須恵器甕胴部。焼成不良(素焼き)で外面は平行タタキ後4条の沈線を施す。内面には同心円當て具痕が残る。

【7地点北西部2③層】26は韓式系軟質土器甕の口縁部～胴部。胴部外面に格子目タタキを施す。27～29も韓式系軟質土器甕の胴部片で、26と同一個体の可能性がある。30は同層排土出土。韓式系軟質土器甕の胴部～底部である。胴部外面上半に格子目タタキ、下半にナデ、同下半に横方向のケズリを施す。31は龜形土器の基部。外面にやや荒いタテハケ、内面にタテナデを施す。32は同層排土出土の須恵器高坏脚部。脚部は2孔透かして据端部をつまみ上げる。33は同層排土出土。韓式系瓦質土器の坏もしくは塊。口縁端部を折り返し、外面には不明瞭な沈線状の痕跡がある。

【7地点南東部③層】34は古墳時代中期の土師器高坏脚部。外面は丹塗りで、内面にヨコハケを施す。35は陶質土器(伽耶系)高坏もしくは脚付壺の据部。外面には1条の突帯があり、その上部には透孔(現状2箇所・4方透かしか)、突帯に伴う沈線の下半部が残存する。36は無蓋高坏口縁部。37は須恵器甕の口縁部。外面に9条単位の波状文を施す。

【7地点排土】38は六連式製塙土器の胴部。内面に布目痕と布の皺が残る。

【7-2地点埋甕】39は佐野焼甕の胴部～底部。外面はナデ、内面にはハケを施し、上半には同心円当て具痕が残る。

【9地点③層】40は繩文土器深鉢口縁部。口唇部に押圧が1箇所あり、口唇部外面に撲糸文と1条沈線を施す。繩文時代中期の里木II式系土器か。41は韓式系瓦質土器の鍋か。外面に格子目タタキを施す。42は須恵器坏底部。底面に断面方形の高台を貼り付ける。

【10地点②・③層】43は土師器甕口縁部。口縁部をやや長く外反させ、内外面にヨコナデを施す。

【10地点②層】44は六連式製塙土器の胴部。内面に布目痕が残る。

【10地点ピット】45は弥生時代前期の壺口縁部。外面はタテハケ後にヨコナデを施し、段を持つ。内面にはヨコハケを施す。

【11地点ピット】46は古墳時代中期の土師器高坏口縁部。内外面にヨコナデを施す。

【13地点ピット】47は六連式製塙土器の胴部。内面に布目痕が残る。

【No.2-1～No.2-2間②層】48は土師器塊底部。底面に断面台形の高台を貼り付ける。摩滅が激しい。

【14地点～15地点間②層】49は韓式系軟質土器甕もしくは鉢の胴部。外面に格子目タタキ、内面にナデを施す。

【15地点③層】50は磁器甕。外面に草花文を染め付ける。見込みは蛇の目釉剥ぎである。肥前系(波佐見)、18世紀後半。

【15地点④層】51は小型丸底壺の口縁部。内外面は丹塗りである。

【16地点④～⑤層上面機械掘削時】52は繩文土器後～晩期の深鉢底部。底面にナデを施す。内面は摩滅が著しい。

【16地点④層か】53は弥生土器もしくは土師器甕(山陰系)口縁部。外面にススが付着する。

【17地点暗褐色粗砂】54は磁器甕。外面に草花文を染め付ける。見込みは蛇の目釉剥ぎである。肥前系(波佐見)、19世紀前半。

【18地点④層】55は土師器甕の口縁部～胴部。口縁部内外面はヨコナデ。胴部外面はタテハケ、内面は横方向のケズリを施す。56は土師器甕の口縁部。口縁部内外面にヨコナデを施す。57・58は韓式系軟質土器甕もしくは鉢の胴部。外面に格子目タタキ、内面にナデを施す。

【No.4～No.5間排土】59は弥生土器壺もしくは鉢の底部。外面は摩滅している。内面にヨコミガキを施す。弥生時代中～後期か。

【22地点表採(21地点③層か)】60は弥生時代後期の甕底部。外面はタテハケ、内面は下から上方向のケズリ後、ナデを施す。

【23地点③層か】61は23地点③層出土と考えられるが、註記の不備により、断定できない。陶質土器の壺もしくは甕の胴部で、外面には繩蔦文タタキ後、8条の沈線を施し、内面にはヨコナデを施す。

b.南東部

【27地点北東部④・⑤層】62～64は古墳時代中期の土師器甕。62・63は口縁部で、62は口縁部外面にヨ

コナデ、内面にヨコハケ、63は口縁部内外面にヨコナデを施す。64は口縁部内外面にヨコハケ、胴部外面にタテ・ヨコハケ、内面にナデを施す。65～68は古墳時代中期の土師器高杯。65・66は杯部で口縁部内外面にヨコナデを施すが、65は下地のハケが顕著に残る。66は67の脚部と同一個体の可能性がある。68は脚部で杯部との接合部で剥離する。脚部はヨコミガキ、裾部にはヨコナデを施す。69～74は韓式系軟質土器。69は甕の口縁部～胴部。外面に格子目タタキ・内面にナデを施す。外面にはスヌが付着する。70・71は甕もしくは鉢の胴部か。70は外面に格子目タタキ、71は外面に繩蓆文タタキの後1条沈線を施す。内面は共にナデを施す。72・73は甕の胴部。外面は格子目タタキ、内面にナデを施し、73はタタキ後に1条沈線を施す。74は鉢底部。外表面にナデを施す。75～77は陶質土器。75は甕もしくは甕の胴部。外面に繩蓆文タタキを施す。76は甕もしくは甕の胴部。外面に平行タタキ後2条沈線を施す。77は器種不明。外面に繩蓆文タタキを施し、内面に矢羽根状の当て具痕が残る。78～82は須恵器。78・80は甕で外面に1条突帯を持つ。79は甕の口縁部。81・82は甕の胴部。81は外面に格子目タタキ後、カキメによる沈線を施す。内面には同心円当て具痕が残る。82は外面に平行タタキを施す。内面には同心円当て具痕が残る。

【27地点南西部④・⑤層】83・84は排土出土。83は土師器小型丸底甕の胴部。外面はヨコハケを施す。内面には粘土紐接合痕が顕著に残る。84は土師器甕口縁部。外面にヨコナデ、内面にヨコハケを施す。85・86は土師器甕口縁部。内外面にヨコナデを施すが、86は外面にタテハケが残る。87～90は韓式系軟質土器甕もしくは鉢の胴部で外面に格子目タタキ、内面にナデを施す。90は排土出土。91は瓶か。外面に格子目タタキを施す。内面は剥離が著しい。92は土師器竈形土器の底部。接合部で剥離し、外面は丹塗りである。93～97は同一個体の土師器竈形土器か。93は掛口部がわずかに残存し、直下に断面方形の1条突帯を貼り付ける。94は把手。先端を尖らせ内部を穿孔する。把手は器壁横断面(A-A'断面)に対して、長軸断面(B-B')断面を約20度傾けて貼り付ける。95は焚口側面、96は焚口上面の底部。小片のため、傾きは検討の余地がある。97は基部で、焚口と底の一部も残存する。底の下部には連続して1条の貼付突帯を持つ。98は土師器竈形土器の基部か。内湾しながら立ち上がる。天地逆の別器種の可能性もある。99・100は同一個体と考えられる土師器竈形土器。99は掛口部で、外面は平行タタキ後ヨコナデを施し、内面には同心円当て具痕が残る。100は基部で、側面に断面方形の突帯を貼り付ける。101～106は陶質土器。101は排土出土。伽耶系平底鉢。口縁部～胴部上半と内面に回転ナデを施し、胴部下半はヘラによる荒いナデを施す。102～106は甕もしくは甕胴部で外面に繩蓆文タタキを施す。タタキ後外面に102は1条、103は3条、104は3条、105は2条沈線を施す。内面は102～105はナデで、106は当て具痕が残る。107～112は須恵器杯蓋。108・109は排土出土で、口唇部に段を持つ。113～120は排土出土。113・114は須恵器杯身。114は焼成不良で土師質である。115は須恵器壺口縁部。口唇部直下に1条の貼付突帯を持つ。116は須恵器甕口縁部。口唇部をつまみ上げており、口縁部外面に櫛描波状文を2段施す。内外面に自然釉が付着する。117・118は初期須恵器壺もしくは甕の胴部。外面に格子目タタキ、内面にナデを施す。119は須恵器甕の胴部。外面に平行タタキ、内面にナデを施す。120は須恵器甕の胴部。外面に平行タタキを施し、内面には同心円当て具痕が残る。121は須恵器の鉢口縁部。外面下半に横方向のケズリを施す。

【No.8⑥層】122は土師器鉢の口縁部～胴部。123は土師器器種不明の底部。底面、外面にタテハケ、内面にナデを施す。外面・底面は丹塗りである。124は須恵器杯蓋。

【No.8-1～2間④層】125は弥生時代前期の壺口縁部で、口縁部に段を持つ。126は土師器杯。底面に重ね焼き痕がある。須恵器模倣か。小片のため、検討の余地がある。127は土師器竈形土器の基部

で、焚口側も残存する。底部は剥離しているが、底部から連続する1条の貼付突帯を持つ。128は把手。一部しか観察できないが、内面に粘土を充填する。129は弥生土器もしくは土師器の底部。器種不明。底部は不明瞭で丸底に近い形態である。大型品と考えられる。

【No.8～No.8-1間⑥層掛土】130は土師器坏口縁部。内外面に回転ナデを施す。131・132は土師器甕口縁部。133は韓式系軟質土器甕もしくは鉢の胴部。外面に格子目タタキの後、1条沈線を施す。134は土師器甕形土器の基部で、焚口側も残存する。基部から上部に底部を持つ。135～140は須恵器坏蓋。136は天井部に回転ナデ及びヘラケズリを施す。137は内外面に回転ナデを施す。139は口唇部に段を持つ。141は須恵器坏身。142は甕口縁部で、外面に1条の貼付突帯を持つ。143は須恵器甕。外面は自然釉により調整は定かではない。内面には回転ナデを施す。144・145は須恵器甕胴部。144は外面に格子目タタキを施し、一部をナデ消す。内面にはナデを施す。145は外面に平行タタキ後、カキメによる沈線を2箇所施す。内面には同心円当て具痕が残る。

【No.8-2付近排土表探】146は陶質土器壺もしくは甕の胴部。焼成不良(酸化炎焼成)で、胴部外面に格子目タタキの後、1条沈線を施す。

【48地点埋甕】147は佐野焼甕の口縁部。口縁部は直立して外面に沈線状の段を持ち、内面を肥厚させる。外面は摩滅により調整は不明。内面はタタキ後に左上がりのハケを施す。他に接合しない胴部片がある。口縁部の特徴から19～20世紀に位置づけられる。

【註】

- 1) 愛知県埋蔵文化財センター・永井宏幸氏のご教示による。
- 2) 愛知県埋蔵文化財センター・永井宏幸氏のご教示による。
- 3) 赤塚次郎(1990)「V考察」愛知県埋蔵文化財センター(編)『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集,愛知
- 4) 下記文献の6②Aないし6②B型式と考えられる。
 - 上山佳彦(2003)「4(3)山口県内の中世・近世の埋甕型式分類及び幅年試案」山口県埋蔵文化財センター(編)『東禅寺・黒山遺跡』(東大円・上徳田地区) 山口県埋蔵文化財センター調査報告第34集,山口
- 5) 前掲註4) 文献の7②A型式と考えられる。